

た　まき　い　がえり
田牧居帰遺跡

——長野県住宅供給公社稲里住宅団地造成地地点——

1 9 9 3 • 3

長　野　市　教　育　委　員　会

序

長野市域においても上信越自動車道・長野自動車道の供用開始が目前に迫り、それに関連する国道をはじめ各種の公共事業が急ピッチで進展しているところであります。また上越新幹線・オリンピック関係の事業も具現化しつつあり、民間における宅地造成開発等も活況を呈しつつあります。まさに長野市は、新中核都市・国際都市として生れ変わろうとしています。

しかし、「物の豊かさ」を追求する一方で、土地に刻まれた歴史－埋蔵文化財－が消滅の一途をたどっているのが現状であります。開発行為とかけがえのない文化遺産の保護には相矛盾する側面がありますが、両者共存の上に、国民共有の財産であります文化財の保護・保存・公開という「心の豊かさ」を求める声も大きくなっていることも周知のとおりです。また失なわれてゆくものを記録に留め、後世に伝えていくのも私達の国民的責務と考えております。

さて、ここに平成4年度において長野県住宅供給公社による稻里住宅団地造成事業に伴う緊急発掘調査を実施いたしました成果を『田牧居帰遺跡』として刊行いたします。調査地は遺跡の破壊が懸念される道路敷部に限定されたものでありましたが、平安時代から中世にかけての重要な遺構・遺物が発見されております。

本書が埋蔵文化財の保護に対し一層のご理解と地域文化向上のための一助としていただければ望外の喜びといたします。

最後になりましたが、本書の上梓に至るまでご支援・ご協力をいたいたいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

長野市教育委員会教育長 奥村秀雄

例　　言

- 1 本書は、長野県住宅供給公社が施工する稻里住宅団地造成事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野県住宅供給公社の委託により、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。その期間は、平成4年7月14日～9月18日（実質稼働日40日）である。
- 3 調査地は、長野市稻里町田牧字西居帰528番地他に所在する。
- 4 保護対象面積は3,000m²で、発掘調査費は5,100千円である。
- 5 本書は、調査によって検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。
- 6 II章「遺跡の環境」のうち1節「地理的環境」・2節「歴史的環境」については、森嶋 稔千曲川水系古代文化研究所主幹の論考を『田中沖遺跡II』より転載した。
- 7 遺構図は、コーディックシステム法により(有)写真測図研究所に委託し、1:20の縮尺で基本図をとり、溝址の一部・水田址様遺構は1:100で、他は1:80の縮尺で掲載した。6・8図の数値は平面直角座標第八系により、標高値は日本水準原点による。
- 8 遺物図のうち古銭・鉄鏃のみ1:2で、他は1:4で図示してある。土器実測図中断面が、20%の網掛けのものは須恵器・須恵質を、10%網掛けのものは灰釉陶器・磁器を、白抜きのものは土師器・土師質を表現する。
- 9 本文中の調査日誌・遺構図等に略号を用いた。S Bは住居址、S Kは土壤、S Dは溝址の意味である。
- 10 調査に関わる諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。遺跡の略号は「T I K」である。

目　　次

序	
例言・目次	
I　　調査の経過	1
1　調査の事務経過	1
2　調査日誌	2
3　調査の体制	4
II　　遺跡の環境	6
1　地理的環境	6
2　歴史的環境	8
3　川中島扇状地と周辺の主要遺跡	9
4　調査地周辺の環境	12
III　　調査	13
1　調査地	13
2　土層序	14
3　遺構の分布	16
4　遺構と遺物	20
IV　　結語	58

挿 図 目 次

1図 川中島扇状地の微高地	6	26図 10号住居址実測図	27
2図 川中島扇状地と遺跡群	8	27図 10号住居址出土遺物実測図	28
3図 田牧居帰遺跡周辺の主要遺跡分布図 ..	10	28図 11号住居址実測図	30
4図 調査地	13	29図 11号住居址出土実測図	30
5図 A地区東端試掘坑土層序実側図	15	30図 12号住居址実測図	31
6図 D・E地区遺構分布図	16	31図 12号住居址出土遺物実測図	32
7図 開発事業地と遺構分布図	19	32図 建物址実測図	33
8図 A～C地区遺構分布図	17,18	33図 柱穴群1実測図	33
9図 1号住居址実測図	20	34図 焼土を伴う溝状遺構、 豎穴状遺構出土遺物実測図	34
10図 1号住居址出土土器実測図	20	35図 豊穴状遺構実測図	35
11図 2号住居址実測図	21	36図 焼土を伴う溝状遺構実測図	35
12図 2号住居址出土土器実測図	21	37図 土壙出土遺物実測図	36
13図 3号住居址実測図	22	38図 水田址様遺構実測図	37,38
14図 3号住居址出土土器実測図	22	39図 土壙・溝址実測図	39
15図 4号住居址実測図	23	40図 土壙実測図	40
16図 4号住居址出土遺物実測図	23	41図 溝址出土遺物実測図	44
17図 5号住居址出土土器実測図	23	42図 溝址実測図	45,46
18図 5号住居址、 柱穴群2、9号土壙実測図	23	43図 溝址実測図	47,48
19図 6号住居址出土遺物実測図	24	44図 溝址出土土器実測図	49
20図 6号住居址実測図	24	45図 検出面出土土器実測図	50
21図 7号住居址出土土器実測図	25		
22図 7号住居址実測図	25		
23図 8号住居址出土土器実測図	26		
24図 8号住居址実測図	26		
25図 9号住居址実測図	26		

I 調査の経過

1 調査の事務経過

昭和62年5月下旬、長野県住宅供給公社より、稻里町田牧に於る遺跡存在の有無について打診がある。

6月3日 現地踏査を実施し、土師器・須恵器片数点を採集する。

昭和62年7月12日付 「埋蔵文化発掘調査に係る事業計画について(照会)」を開発部局・関係機関へ送付し、

昭和63年度における埋蔵文化財保措置を講ずる。

8月1日付 長野県住宅供給公社用地開発部長より「(仮)稻里団地造成事業」計画の回答がある。

10月2日付 「埋蔵文化財包蔵地と認定されるため、開発行為施工前に試掘調査を必要とします。」旨の回答を提出する。その後、用地交渉及び農地転用等の諸問題により試掘が困難であるとの判断をし、直接発掘調査にかかる協議を進める。

昭和64年1月5日付 長野県住宅供給公社理事長宛に発掘調査計画書・予算書を提出する。

平成4年3月 用地交渉がまとまり、農地転用認可次第に発掘調査が可能である旨の協議がある。

6月3日付 遺跡推定地全面削土から盛土(約50cm)造成へ事業計画の変更があったため、埋蔵文化財保護対象を道路敷部に限定し、変更計画書・予算書を提出する。

6月3日付 田牧居帰遺跡発掘調査の実施案を起案し、調査の準備に入る。

6月3日付 文化財保護法第57条の3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘の通知について」の提出がある。「開発事業地のうち西側部分に遺物の散布が見られ埋蔵文化財包蔵地と認定される。工事は50cm程の盛土造成になり、遺跡に与える影響はないものと思われるが、破壊が懸念される道路敷部分を発掘調査を実施し記録保存する必要がある。」旨の意見を付して長野県教育委員会教育長宛に進達する。

6月5日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。



I-1 調査地近影

6月20日付 文化財保護法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を文化庁長官宛提出する。

7月7日付 重機等の賃貸借契約書を締結する。

7月8日～7月17日 重機等により表土除去作業を開始する。

7月14日～9月18日 発掘調査を実施する(実施稼働日40日)。

9月17日付 長野県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」があり、「発掘調査を行うこととしたい」旨の記述がある。

9月21日付 長野南警察署長宛、「埋蔵文化財の拾得届」「埋蔵文化財保管証」を提出する。

9月21日付 長野県教育委員会教育長・長野県住宅供給公社理事長宛、「発掘調査終了通知」を提出する。

平成5年2月1日より 報告書刊行の為の整理作業を実施する。

3月25日 『田牧居帰遺跡—長野県住宅供給公社稻里住宅団地造成地点一』を刊行する。

2 調査日誌

7月3日(晴) 調査地点・範囲及び重機搬入路等確認のため現地協議を行う。

7月8日(晴) 調査地設定地の草刈作業を実施する。本日より重機による表土除去作業を開始する。

7月14日(曇) 調査機材を搬入し、天幕の設置後、A地区の遺構検出をし、SB1・SD1の調査を開始する。

7月15日(曇) SB1、SD1の調査継続し、SB2の調査を開始する。

7月16日(晴) 昨夜の降雨により、B地区両壁下に排水溝を掘る。昨日の調査を継続し、完掘する。

7月17日(曇) SD2・3の調査を開始する。A区北側遺構(SB1・2、SD1)の写真撮影を行う。

7月20日(晴) B地区遺構検出後、SK1～6、SD3、SZ3の掘り下げにかかる。

7月21日(曇) 昨日の調査継続。SB2・SD2の精査後、写真撮影を行う。A地区東端試掘坑の土層実測・写真撮影を行う。

7月22日(晴) SB2の平板測量後、SD3の調査を継続する。B地区SD3～6、SB3の調査を開始する。

7月23日(晴) SD3～6、SB3の調査継続。SK2～6、SZ2・3の調査を開始する。

7月24日(晴) SB3、SD3、SZ1・2の調査継続。SB4、SK7の調査開始SD1の土層実測作業を行なう。

7月27日(晴) SB3・4、SK7、SD3の調査継続。

7月28日(曇) 昨日の調査継続。SB5・6、SK8・



I-2 7月22日



I-3 7月27日

9、S D 7 の調査を開始する。

7月29日(晴) 昨日の調査継続後、写真撮影を行う。

A地区 S D 8 の調査を開始する。

7月30日(晴) S D 8 の調査継続。S B 5 の写真撮影。

7月31日(晴) S D 8 の精査後、写真撮影・土層実測作業を行う。B地区東側の検出後、S K11、S D 9 の調査にかかる。

8月3日(曇) S D 9・10の調査継続。S D 9 の写真撮影を行う。

8月4日(晴) S D 9 の調査継続。

8月5日(晴) S D 9 の精査後、写真撮影を行う。

8月6日(晴) B地区西側遺構の精査後、柱穴群1の調査を開始する。B地区的土層実測作業を行う。

8月7日(晴) C地区 S D 11~14の調査を開始する。

B地区西側遺構及びS D 9 の写真撮影を行う。

8月10日(晴) S D 11~14の調査継続。A・B地区的遺構測量を行う。

8月11日(曇) S D 11~14の精査後、写真撮影を行う。B地区的遺構測量継続。

8月12日(曇) C地区南側の黒褐色土層落ち込みの調査を開始する。遺構図結線作業を行う。

8月17日(晴) 12日の調査継続。稲株様の小さな落ち込みが点在する。

8月18日(晴) 昨日の調査継続。S D 14・15、建物址、水田址等を検出する。

8月19日(晴) S D 11~13・16・17、S K12・13の調査を開始する。C地区南側遺構の写真撮影を行う。

8月18日(晴) S D 12・13・16・17の調査継続。

8月21日(晴) B地区東側遺構の精査後、写真撮影。

8月24日(晴) D地区 S B 7~8、S D 18~20の調査を開始する。

8月25日(晴) 昨日の調査継続。S K15・17の調査を開始する。

8月26日(晴) S B 7 の写真撮影。S D 18~20、S K 15・17の調査継続。S K16の調査を開始する。

8月27日(晴) S B 10、S K18、S D 21~23の調査を開始する。S K17の集石実測・写真撮影を行う。

8月28日(晴) 昨日の調査継続。S K17の集石断面図



I - 4 7月31日



I - 5 8月5日



I - 6 8月18日



I - 7 8月25日

作成後、撤去、写真撮影を行う。

8月31日(晴) D地区南側を重機にて約10cm掘り下げる。S B11・12、S K19~22、S D24・25を検出する。S B8・9、S D21~23の精査後、写真撮影を行う。B・C地区の遺構測量を行う。

9月2日(晴) 重機による掘削継続。S B10・11、S K19~22、S D24・25の調査を開始する。S D18~20の写真撮影を行う。

9月3日(曇) S B10の精査後、写真撮影・平板測量を行う。S K19~22、S D24・25の調査継続。

9月4日(晴) S B11・12、S K20・21の調査継続。

9月7日(晴) S B11・12、S D24・25の精査後、写真撮影を行う。S K23・24、S D26の調査を開始する。

9月8日(晴) S K21~27、S D26・27の精査後、写真撮影をもって現地における調査をほぼ終了する。

9月9日(晴) C・D地区遺構測量・D地区土層実測。土器洗浄作業を行う。

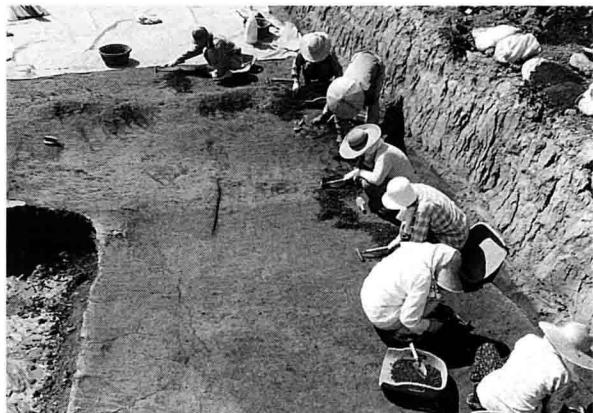
9月10日(曇) S B10~12カマドの精査。土器洗浄。

9月11日(曇) 昨日の調査継続。土器洗浄。調査器材の撤収をもって発掘作業を終了する。

9月14日~18日 土層図・遺構図の再検討を実施し、現地に於る調査を完了する。



I-8 8月28日



I-9 9月2日

3 調査の体制

(財)長野県埋蔵文化財センターが係わる上信越自動車道・北陸新幹線を除き、長野市内における緊急発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施し、田牧居帰遺跡に於ける組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村秀雄

総括管理者 長野市埋蔵文化財センター所長 小山 正

〃 所長補佐 山中武徳(契約・予算・決算等出納事務管理)

〃 職員 青木厚子(出納事務・庶務)

調査係 係長(調査主任) 矢口忠良(発掘調査指揮・報告書編集)

〃 主査 青木和明

〃 主事 千野 浩

〃 〃 飯島哲也

〃 専門員 中殿章子

〃 〃 横山かよ子

〃 〃 (調査員) 笠井敦子(発掘調査補助、遺構図結線、遺構図製図・清書)

調査係 専門員 山崎佐織
〃 〃 山田美弥子
〃 〃 (調査員) 寺島孝典(発掘調査補助・遺構図結線)
〃 専門主事 小松安和
〃 〃 羽場卓雄
〃 〃 (〃) 大田重成(〃〃) 土層実測・遺物復元

調査員 矢口栄子(発掘調査補助、土層実測、遺物実測・淨書) 青木善子(報告書図面整理・淨書)

調査作業員 向山純子・西尾千枝・丸山もと・丸山 清・富所順子・小林利男・和田ふくの・池田賢二・大田米子・若林かつ子・小松末喜子・小林こま代・藤沢たつい・岡本登美子・矢口晋平・中沢元子

整理作業員 池田見紀 岡沢治子・小泉ひろ美・徳成奈於子・西尾千枝・向山純子・武藤信子

遺構測量委託 (有)写真測図研究所

以上の皆様のほかに、長野県住宅供給公社職員立林安一・柳沢征人・狩野正明・小林尚登・西沢清司・小松正始各氏、北信土建(株)野沢敏氏、稻里町在住の島田治作、豊岩百合子各氏の方々からは、公私に亘りご援助をいただきいた。記して感謝申し上げます。



I -10 発掘調査参加者

II 遺跡の環境

森嶋 稔（千曲川水系古代文化研究所主幹）

1 地理的環境

信濃の中央部を縦貫し、中央山地を横切って東流する犀川が、細く曲流するV字谷から開放されるのは犀口である。犀口を扇頂とする、いわゆる川中島扇状地は、極めて巨大な地形を千曲川水系の中にしめている。千曲川の一支流である犀川は、中央山地の隆起運動にうち勝って東流する強力な浸蝕河川であるが、犀口をもってその浸蝕性は強力な堆積性となって、善光寺平中央部へと展開しているのである。その堆積力は極めて優勢であったと思われる歴史的状況である。

中央山地は第三紀末の海底堆積物によって構成されているが、それは第四紀の中葉より隆起をはじめ、陸化、



1図 川中島扇状地の微高地（1：25000）「長野市防災基本図地形分類図」より

1 田牧居帰遺跡 2 南宮遺跡 3 田中沖遺跡 I 4 田中沖遺跡 II 5 裏川原遺跡 6 花立遺跡

凡例 Fb 扇状地内の微高地 Fs 扇状地内の低地 nl 自然堤防 o 旧河道 k 高水敷 t 低水敷 f 淹澱平野

川中島扇状地の地表計測

	標高 m	距離 m	標高差 m	傾斜度 %	面積 km ²			
唐猫	355	6,800	-25	0.36 (0.17°)	21.3			
松代	352	8,100	-28	0.35 (0.15°)			49.8	
落合橋	340	9,900	-40	0.40 (0.18°)		28.5		
屋島北	325	13,000	-55	0.42 (0.18°)	21.7			71.5

※犀口標高380mを基点としたもの

造山運動を続けているように観察される。その隆起速度は中世末に至って若干鈍ったように観察されるが、それは次のような理由によるものである。

①古代、中世における犀川扇状地の堆積力は極めて強力なものであり、それによって千曲川は、右岸上信越山塊の山脚部をトレースするように流れていること。それは千曲川の浸蝕力より犀川の堆積力の方が優位にあることを物語る。

②それが近世に入ると次第に犀川扇状地の堆積力が弱まったことが明らかである。その1つに千曲川は次第に山脚部からはなれて、かつて犀川堆積勢力のエリア内にと流路を移動していることによって把握できる。中世後期の松代・海津城も元は水城であったとされ、松代荒神町には現在でも舟つき場の石垣が残されている。

③江戸初期、松代藩城代花井吉成による川中島扇状地内の農業用灌漑堰の改修が行われているが、その犀口の取水口については、何回かの改修の記録が残されている。それは昭和30年代の小田切ダム建設に至るまで続けられてきたのであるが、それは取水口を上流へ上流へと移動した記録なのである。結論的に言えば犀口取水口における河床の沈下である。扇状地の堆積力はにぶり、扇状地そのものの浸蝕が始まっているのである。裾花川はかつて長野市県町で犀川の堆積力におされ東流していたが、流路の人工的変更によって犀川に合している。これも堆積力の今昔を物語る重要な事実である。

古代、中世に至るまで、川中島扇状地は中央山地造山運動にかかる新鮮な堆積のくり返しであるとみることができる。その川中島扇状地は、現犀川右岸地域に49.8km²の広さをもち、左岸地域に21.7km²、合わせて71.5km²に及ぶものである。その傾斜度は0.4%(0.18°)内外である。ここには犀川はもとより、北から小山堰、鯨沢堰、下堰、中堰、上堰、そして御幣川がこの扇状地を走っている。そのほとんどは自然流を改修したものであって、この堰の古さをも表わしていると言えよう。

なお弘化4年(1847)の善光寺大地震には犀川が岩倉山の山崩れにて20日間塞ぎ止まり、のち満水の上崩壊した。川中島扇状地の途方もない土量の堆積がこの時にみられたのであるが、これが近年における最大で最後の堆積である。しかしこの堆積は、自然の突然の災害というアクシデントによるものであることを注意しておかねばならない。

川中島扇状地はこうした成因によって形成されたものであることをみておく必要がある。

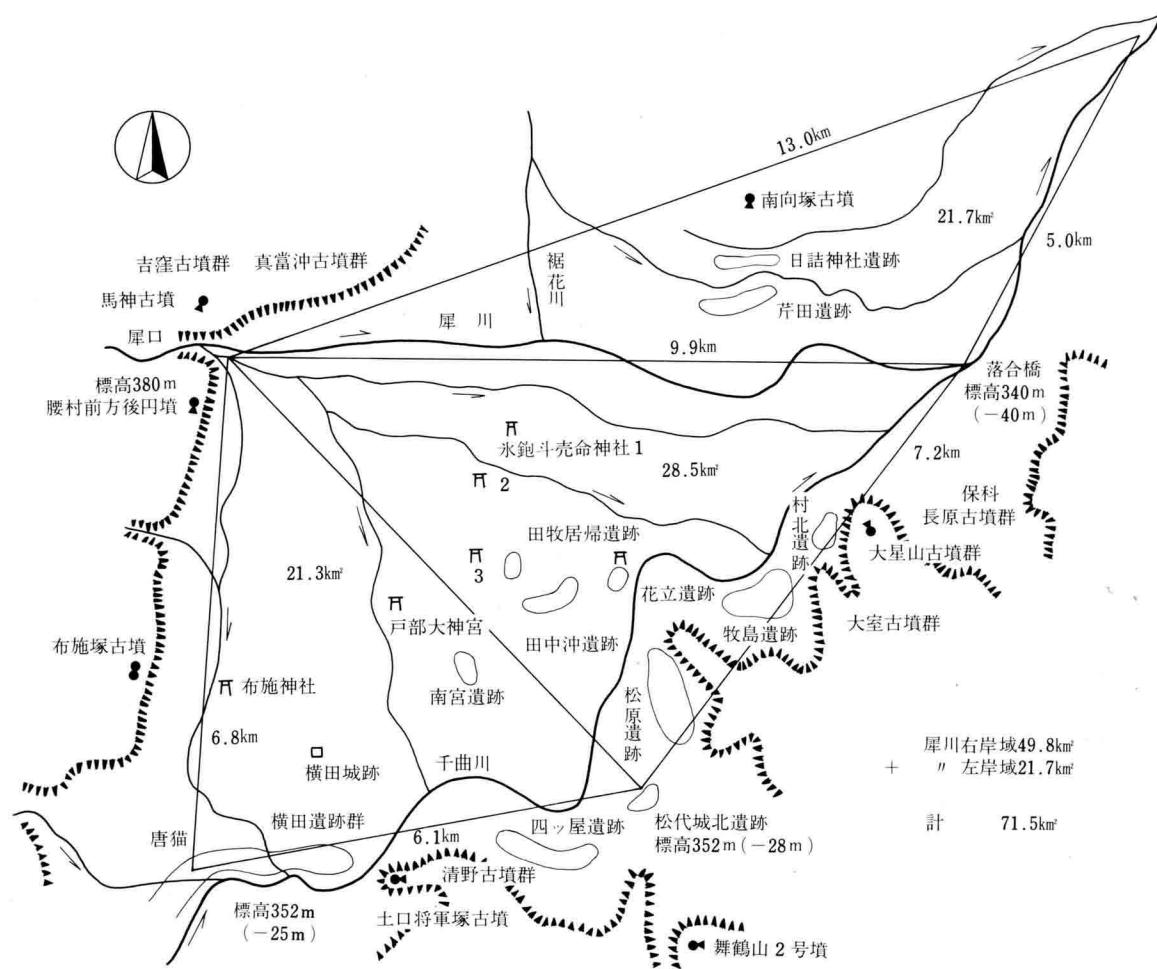
なお善光寺平そのものの成因が信越山塊の微隆起による一種のたたえの感があるのであるのだから、相関する形成構造をなしているものとみることができよう。

田中沖・田中遺跡はそのほぼ中央部の標高352m、扇端に近いところに位置しているのである。千曲川左岸、川中島扇状地には既知の遺跡は極めて少ないので注意されるところである。

2 歴史的環境

川中島扇状地の歴史的展開は有史時代になってめざましい。12世紀末、木曾義仲対城資永による横田川原戦（1181年）にはじまり、いわば中世の幕あけにつながる事件として重要な位置をしめるものがある。源頼朝の善光寺再建（1191年）そして参詣（1197年）はこの善光寺平のもつ重要な意味を内蔵していると言うべきである。

10世紀、いわゆる延喜式と倭名抄の記載にかかわる神社及び郷名については、ここに更級郡の北域、そして水内郡南域・埴科郡北域では、おそらくは信濃最大の人口密集地域としての重要な課題が包含されていたに違いない。更級郡9郷11社中3郷3社が、水内郡8郷9社中2郷2社はおおむねこの川中島扇状地内に存在した可能性が強い。犀川右岸のみに限定してみても、斗女・池郷・氷鉈郷は確実に位置づくものであるし、布施神社・氷鉈斗売命神社・頤氣神社はこの内部にあるものと考えてよい。特に氷鉈郷・斗女郷は特に巨大な共同体であったとみることができる。というのはその氏族の奉祭する氏神である神社はおそらく氷鉈斗売命神社であったと考えてよく、氷鉈・斗女両郷はもともと単一の氏神をもつ地縁共同体であったに違いないものであろうからである。それが行政的な枠であるおよそ50戸をもって1郷とするというリミットによって2郷へと分けられて搭載され、行政組織とされていたとみることができよう。従って、この氷鉈斗売命神社を中心とする共同体が大きなものであったかをうかがい知ることができる。それにもう一つ、おそらくは郷にはなれない単位の共同体であったと思われる布施神社を中心とするものは、今日においても川中島扇状地の南部に位置する一つのエリアを専有



2図 川中島扇状地と遺跡群

するものであるが、おそらくこの犀川右岸地域だけでも4郷に近い共同体の存在を確認できるように思うのである。

延喜式左馬寮勅旨牧、信濃16枚のうち大室牧は犀川右岸東端地域に位置していたにまちがいなく、その牧はこの地域を専有する氏上によって把握され、経営されていたものと見ることもできよう。古代における水稻農耕に深く関与する神社はその存在の密度によっても、水稻農耕の密度を知ることのできる尺度でもある。更級郡9郷11社・埴科郡7郷5社・水内郡8郷9社・高井郡4郷6社は、時に伊那郡4郷2社・佐久郡7郷3社と対比してみると明らかであろう。人口密度の側面だけでみても、伊那谷をすべて合わせて4郷に対し、犀川右岸地域のみにても4郷に近い存在であるということは重要な問題であるといえるのではないだろうか。この川中島扇状地の高い農業生産力を物語ってあますところがない。

田中沖遺跡は、特に古墳時代より平安朝を中心とした遺跡であるが、ここにふれてきた歴史的展開の中に位置づいているものとみてよい。

古墳時代の環境も同様にしてみると興味あるあり方をしていることに気づく。特に6～7世紀代後期古墳群の存在は、その10世紀における人口密度現象に強い相関関係を示しているのであって、とりわけ長原・大室・松代古墳群はその数において瞠目すべきものがある。それはとりもなおさず、この川中島扇状地の高い農業生産力を背景としたものであったと理解でき、それ以外の歴史的背景の理解を許容できないものとみることができよう。いわば、すでに地理的環境においてみたように千曲川は古代においては山脚部をなめるようにして流れていたのであるから、千曲川右岸は松代以南を除いて、以北には沖積地はまったくなかったのである。大室・長原古墳群は川中島扇状地の対岸だったのである。

その支配構造の存在を可能にした、川中島扇状地の生産力は、農業生産を基底とした共同体であったことは疑うところではない。

そうした歴史的環境の中にあってもなお、この川中島扇状地における遺跡数はあまりにも少ない。堆積土量の薄くなる扇端部にのみ遺跡が明らかになっているという現実をみると、やはりその埋蔵されている量の大きさを推定することができる。6～12世紀における人口過密地域の遺跡の課題として、田中沖遺跡のもつている意味は大きい。今後更にこの地域における歴史的展開を明らかにしていく手がかりを与えてくれよう。

〔付記〕 地理的環境及び歴史的環境については、長野市の埋蔵文化財第42集『田中沖遺跡II—長野市神明広田地区画整理事業地点一』から転載した。田牧居帰遺跡は田中沖遺跡同様川中島扇状地の扇端部に位置する遺跡で、北西約1.0kmにあり、田中沖遺跡を田牧居帰遺跡に読み替えていただければ、そのまま通用する論考である。

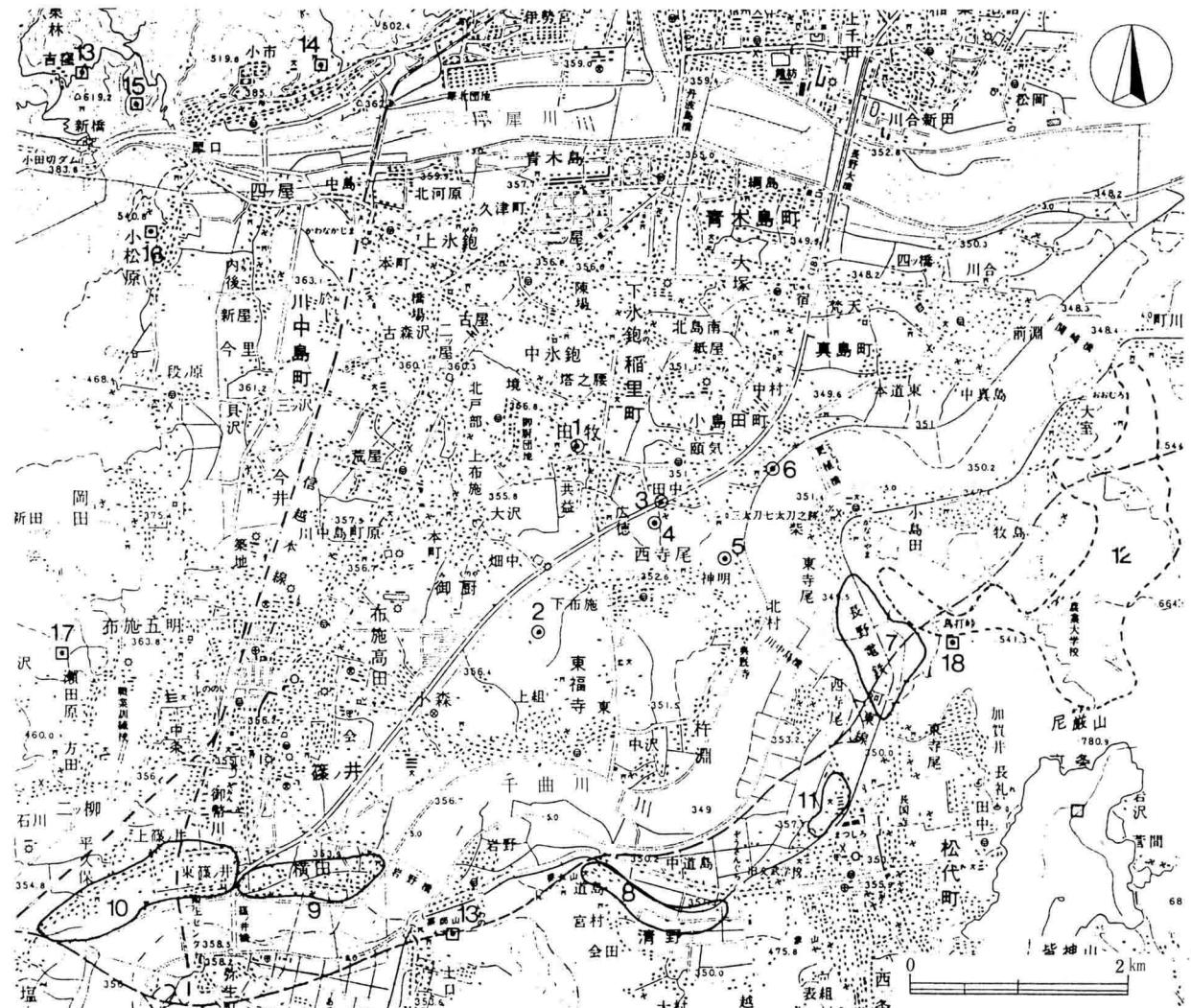
3 川中島扇状地と周辺の主要遺跡

- 1 田牧居帰遺跡 別記
- 2 南宮遺跡 平成3年度において都市計画道路五明西寺尾線建設にともなう緊急発掘調査が実施され、平安時代住居址25軒、土坑10基、溝跡8本等の遺構、同時代土師器・須恵器・中国宗代白磁、小刀等の金属製品が出土している。遺構の分布状態から小規模な集落跡が予想される。長野市教育委員会『南宮遺跡』平成4年
- 3 田中沖遺跡I 昭和53・54度に国道18号線バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査が実施された。調査面積1,800m²内に、古墳時代中期から平安時代にいたる住居址30軒、柱穴群、土坑8基、溝跡3本等、が検出され大室古墳群や後の富部御厨を支えた集落遺跡として注目されている。弥生時代後期土器片も採集されている。長野市教育委員会『田中沖遺跡』昭和55年

4 田中沖遺跡II 昭和63年度・平成元年度に長野市神明広田土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査が実施された。調査地は田中沖遺跡から水田を挟んで南に展開する微高地上の遺跡である。調査面積4,100m²内に古墳時代後期から平安時代末に至る住居址106軒、柱穴群13カ所、溝跡29本を検出し、田中沖遺跡Iと同様な性格の遺跡であることが判明してきた。中でも平安時代に比定される大形の3軒の住居址及び壙・椀類を主体とした出土品の多さは、時代の背景の中から認識すべき重要な示唆に富んでいる資料である。長野市教育委員会『田中沖遺跡II』平成3年

5 裏川原遺跡 川中島扇状地の末端部に位置し、平成4年度において県道長野真田線拡幅改良事業に伴う緊急発掘調査が実施され、奈良・平安時代の住居址30軒、土坑23基・溝跡10本等を検出した。報告書の刊行は平成5年度の予定。

6 花立遺跡 現在は遺跡推定範囲のほとんどが河川敷に入っている。弥生時代後期の甕・壺・高壙等が表面採集されている。更級埴科地方誌刊行会『更級埴科地方誌第2巻』昭和55年



3図 田牧居帰遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1 : 50000)

1. 田牧居帰遺跡
2. 南宮遺跡
3. 田中沖遺跡I
4. 田中沖遺跡II
5. 裏川原遺跡
6. 花立遺跡
7. 松原遺跡
8. 四ッ屋遺跡
9. 横田遺跡群
10. 篠ノ井遺跡群
11. 松代城北遺跡
12. 大室古墳群
13. 吉窪古墳群
14. 真當沖古墳群
15. 馬神古墳群
16. 腰村前方後円墳
17. 布施塚古墳群
18. 北平1号墳

7 松原遺跡 千曲川右岸に展開する自然堤防上に位置し、古くから弥生時代以降の複合する大規模な遺跡として周知されてきた。特にここ数年発掘調査が集中して実施され、内容・性格・範囲等明らかになりつつある。平成2・3年市道松代東111号線拡幅改良地点（1,800m²、弥生時代～平安時代住居址23軒、土坑24基、溝跡15本、柱穴群3カ所等）、平成2年長野南農協集出荷場建設地点（2,100m²、平安時代を中心とする住居址35軒、建物址5棟、弥生時代住居址25軒、環状溝跡13本、土坑等）、平成2～4年県道中野更埴線拡幅改良地点（8,000m²、弥生～奈良・平安時代住居址86軒、建物址4棟、環状溝跡13本、平安時代製鉄遺構10基等）、平成4年市道松代東63号線（900m²、弥生・平安時代住居址10軒、土坑8基、溝跡8本等）、が長野市教育委員会によって調査されている。上信越自動車道建設地点の大規模発掘が平成元年度より3年度にかけ、（財）長野県埋蔵文化財センターにより実施され、縄文時代から中世に亘る遺構・遺物が検出されている。特に、縄文時代では前期にまで溯る遺構・遺物が発見されており、沖積地に縄文時代晚期以前の遺跡はないものとの従来の考え方を覆すもので、旧地形のありかたとともに再考を促す問題を提起した。遺構・遺物においては弥生時代中期のものが多数検出され、環濠がめぐる等から該期の母村的性格が強いことがわかつてき。長野市教育委員会『松原遺跡I・II・III』平成3・5年 長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センターワン報7・8』平成3・4年

8 四ツ屋遺跡 千曲川右岸に展開する自然堤防上の遺跡で、後背湿地を有する大規模な集落跡の存在が予想されている。昭和52年の清野小学校校舎改築地点（1,200m²）の調査では、弥生時代から平安時代にかけての住居址16軒・土坑39基・溝跡14本等が検出され、昭和54年の同校プール建設地点（400m²）からは弥生時代の住居址2軒、建物址1基、土坑7基が、近接の清野保育園建設地点（1,000m²）からは住居址17軒・土坑43基・溝跡11本が確認されている。また道島地籍から布目瓦が採集され、廃寺址（道島廃寺址）の存在が予想されている。更に小学校地点からは周溝及び円筒埴輪・初期須恵器を伴う祭址遺構（古墳）が昭和35年に更級教育会によって調査されている。平成2・3年には遺跡中央付近を圃場整備事業に伴い発掘調査を実施し、溝跡や建物址等を確認し、主体集落は千曲川寄りに展開することがわかつてき。高野行栄「四ツ屋遺跡について」『埴科教育5』昭和32年 小林秀夫「長野市四ツ屋遺跡について」『信濃考古36』昭和51年 長野市教育委員会『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塙崎遺跡群』昭和55年

9 横田遺跡群 千曲川左岸の自然堤防上に展開する遺跡で、篠ノ井遺跡群同様大規模な集落址が予想されているが、本格的な発掘調査は富士宮遺跡の1件だけである。また子持勾玉が3個出土している遺跡である。調査は、昭和63年に中部電力（株）による鉄塔移設に伴い実施され、面積は約225m²である。古墳・平安時代の住居址4軒・土坑10基等が検出されている。長野市教育委員会『横田遺跡群富士宮遺跡』昭和62年

10 篠ノ井遺跡群 横田遺跡群と国道18号線をはさみ、上流の自然堤防上に位置する。発掘調査は遺跡の西側に集中し、昭和54年大規模自転車道地点（約600m²、弥生時代～平安時代住居址31軒、土坑墓1基、溝跡7本、方形周溝墓1基、中世土壙墓1基、井戸址8基）、昭和55年～平成2年聖川堤防改修地点（5,340m²、弥生時代～平安時代住居址88軒、方形周溝墓10基、土坑128基、溝跡26本等）、平成元年市道山崎唐猫線地点（1,170m²、弥生時代～平安時代住居址17軒、土坑23基、溝跡6本等）、平成2・3年県道篠ノ井稻荷山線道路改良地点（709m²、弥生時代～平安時代住居址32軒、土坑45基、溝跡7本等）及び平成2・3年の（財）長野県埋蔵文化財センターによる長野自動車道建設地点では、約3,000m²から弥生時代～平安時代住居址394軒、建物址20軒、土坑1,017基、墓18基、溝跡63本等が検出されている。長野市教育委員会『篠ノ井遺跡群I・II・III・IV』昭和55年・平成元・2・4年 長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センターワン報7・8』平成3・4年

11 松代城北遺跡 国史跡松代城から北に展開する自然堤防上の遺跡であるが、本格的な発掘調査が行われておらず、その内容は不明に近い。平安時代を主体とする遺物が採集されている。

12 大室古墳群 東日本における代表的な古墳群で、その数500余基にのぼると言う。詳細には大星山支群・大室谷支群・北谷支群・霞城支群・金井山支群に大別され、更に地形より細別が可能である。この古墳群の特色は、朝鮮半島の系譜を引いているものと考えられている積石塚古墳で、合掌形石室の存在である。これらは昭和61年において221号墳の明治大学による調査によって、5世紀代に位置づくものが初源であることが判ってきた。大塚初重「大室古墳群」『長野県史 考古資料編』昭和57年 明治大学考古学研究室「大室ニュース13」昭和62年

13 吉窪古墳群 吉久保城山の北側山麓山地に6・7基存在したが、現在2基のみ確認される。古墳群の立地としては生産地を望むことができない位置にあり、特異な性格を有している。上水内地方誌編纂会『上水内郡地方誌 考古編』昭和51年

14 真當冲古墳群 犀川を眼下に望む山腹台地先端部に構築された4基の古墳をもって形成される。いずれも円墳で、盗掘をうけた形跡がなく、処女墳の可能性が高い。立地や主体部が明確でない点から5世紀代の所産と考えられる。

15 馬神古墳群 川中島扇状地扇頂部山頂に位置し、全長31m程の前方後円墳を盟主的存在として、4基の円墳をもって形成する。占地等から犀川に関与する首長墓とも考えられ、他の前方後円墳と趣を異にする。西田正規・東憲章「長野市小田切馬神古墳の測量調査」『信濃39巻4号』昭和62年

16 越村前方後円墳 川中島扇状地を眼下に望む比高20m程の台地状に位置し、墳丘全長43mを測る。後円部墳裾から円筒埴輪片が出土しており、これらから6世紀代前半に位置付けられ、最後の前方後円墳ともくされている。浦原宏行・高崎光司・滝山雄一「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃40巻4号』昭和63年

17 布施塚古墳 篠ノ井市街地を眼下に望む山腹台地先端に位置し、平坦部との比高差は約70mである。前方後円墳として周知されてきたが、筑波大学の調査により、直径20mと10.5m前後の円墳であることが判明した。占地や主体部の想定から6世紀前後の所産と考えられている。文献は16と同じ。

18 北平1号墳 平成3年度において(財)長野県埋蔵文化財センターにより、上信越自動車道建設用土取り事業に先立ち緊急発掘調査が実施され、当地域では最古の古墳時代初頭に位置するものと考察され、一辺14m・高さ1.5m程の方形墳丘墓であることが判明した。主体部は石郭状施設を有する木棺直葬で、2基確認されている。長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センター年報8』平成4年

4 調査地周辺の環境

川中島扇状地内の遺跡は、5遺跡6ヶ所確認されているにすぎない(3図)。前述の1~3節で瞥見したように少なくとも古墳時代中期には集落の形成があったはずであり、御厨の確立期には大規模なものが予想される。戦国時代甲斐の武田信玄の善光寺平への侵攻は、当地域の生産力の高さに目をつけたものと考えられており、古代から農耕開発、人口の増加が著しかったことをうかがわせる。

現在周知されている遺跡の立地は、扇端部近くの中洲状微高地上にあることが共通している。しかし発掘調査は開発事業地の一部分を実施したのみである。正確な遺跡範囲は、帯状に伸びる微高地上に展開するものと推定されるだけでいまだに確定していない。また時代においても、田中沖遺跡Iや花立遺跡で弥生時代後期の遺物が採集されているが、発掘調査で該期の遺構が発見されておらず、内容等の解明は今後の課題である。扇状地内の最古の遺構は、田中沖遺跡Iの古墳時代初頭に位置するもので、後期に至って増加傾向にあるものの、他の遺跡同様平安時代末葉の遺構・遺物が主体となる。扇状地のやや奥まった本遺跡や南宮遺跡では平安時代以降のものに限られ、他の時代のものは検出されない。

III 調査

1 調査地

田牧居帰遺跡は、千曲川西方約2.5km付近、標高355m前後の微高地上に位置し、川中島扇状地内を流下する上堰、中堰、下堰のうち下堰の系統に属する広田沢堰に添って展開するものと思われる。現地目は宅地・果樹園・畑地が多いが、もとは水田であったらしい。しかし近隣に水田が現存するところから見るとこの地目変更は、他より高く水のかかりが思わしくなかったものと思料され、旧来の地形を保持しているものと思われる。ちなみに調査地周辺の航空写真（III-1）を観察すると、提示写真の中央より東寄りに北方向から下氷鉋小学校にかけて蛇行する河川敷跡が認められる。更に調査地北方から東側にかけても明瞭ではないが旧河川路への痕跡がうかがわれる。

遺跡は、地形等から南北幅450m・東西最大幅250m程を推定し、旧村落が形成され現在に至っている広田地籍も微高上にあり、ここにも遺跡の存在が予想される。現状では両遺跡の接点付近の地形改変認められ両者の関係は定かでないが、一応地目等から別名称の遺跡として考えておく方が妥当なものと考えるが、内容・性格においては相違がないものと予想される。



4図 調査地

調査対象地は、水田化しているため地形変換点を見い出すことが困難だったので地目が畠地・果樹園等目安に設定したが、本調査の結果この設定はほぼ誤りがなかった。当初の計画では、この遺跡推定を削平造成する計画であったが、下水道等勾配傾斜の関係から逆に盛土造成へ事業内容変更があったため、遺跡破壊が懸念される道路敷部に限定して調査を実施した。そのため範囲確認調査の性格が強い調査になった。

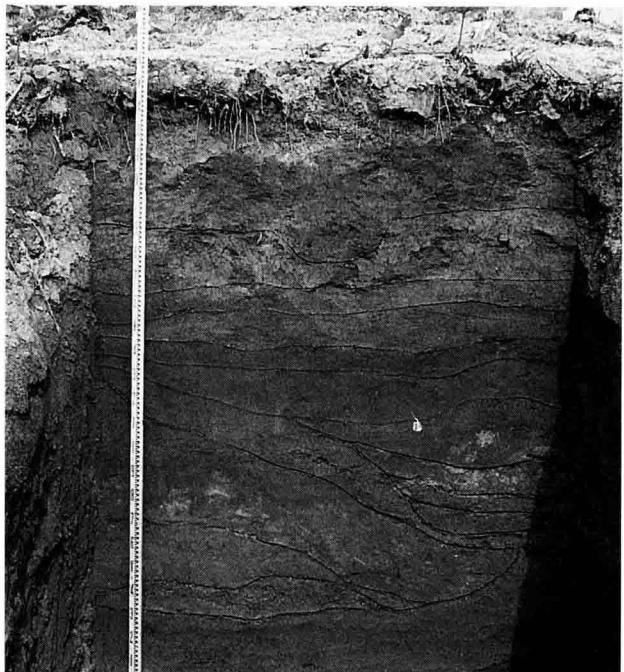
2 土層序

A地区調査地東端へ、土層確認のため重機により約2.5m程の試掘坑を入れ、この観察から基本的土層の抽出を試みたが、調査の結果から各地区ともに表土層及び2層の暗褐色粘質土層を除き一様でないことがわかった。試掘坑の観察では、1.2m付近まで小さな溝状のものが入るもの比較的平坦、均等の土層序を形成するが、それよりも深くなると大溝様の落ち込みが見られ、数次に亘る堆積土が観察できる。大溝の最下層（10層）の燈茶褐色砂質土層から古墳時代の高坏と推定されるローリングを受けた小土器片が確認され、平安時代以前、古墳時代以降の溝と推定される他は、遺物の出土がなく時代比定は困難である。遺跡の東縁部においては度重なる自然流路があったことがうかがえ、古墳時代土器の確認は上流に該期の遺跡存在を裏付けるものとして重要な資料である。

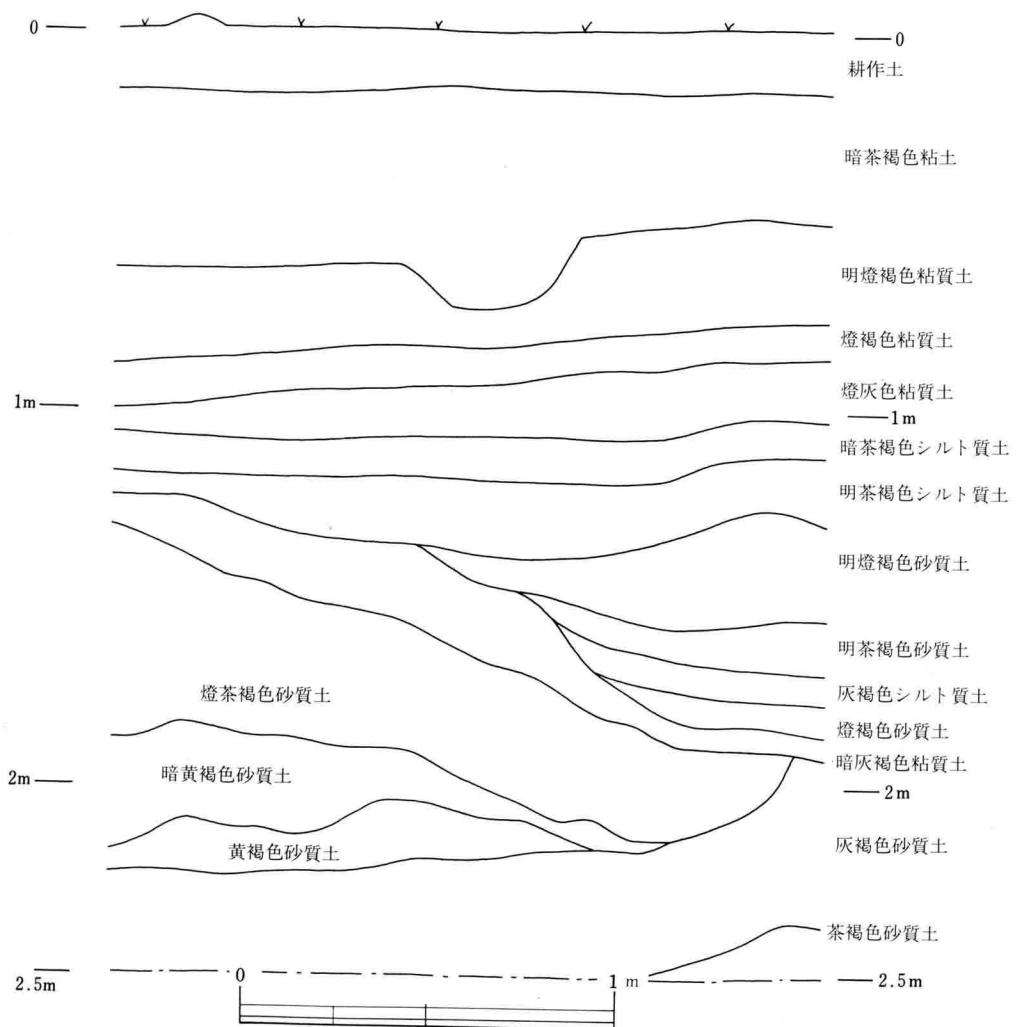


III-1 調査地(○)周辺の航空写真

今回の調査での遺構検出面は、3層上面にあたる現地表下50cm～60cmの明燈褐色粘質土を基準にする。ただし、A地区西方は黄褐色砂質土層、B地区西側では小礫を多く含む暗黄褐色砂質土からの検出である。小礫を多含する層はこの調査地付近に限定される。大きな洪水様の出水によりもたらされたものであろうが、調査地では高所に位置することや構形態にならないことから古い時代の所産であり、安定した地域であったことをうかがわせる。B地区的東西に見る検出面は、現地形以上に東への傾斜度が強くなり、西端の4号住居址の検出面と東側11号溝址では0.9mの差があり、南東方向への傾斜も有しD地区南端の17号土壙とでは1.9mの比高差になる。



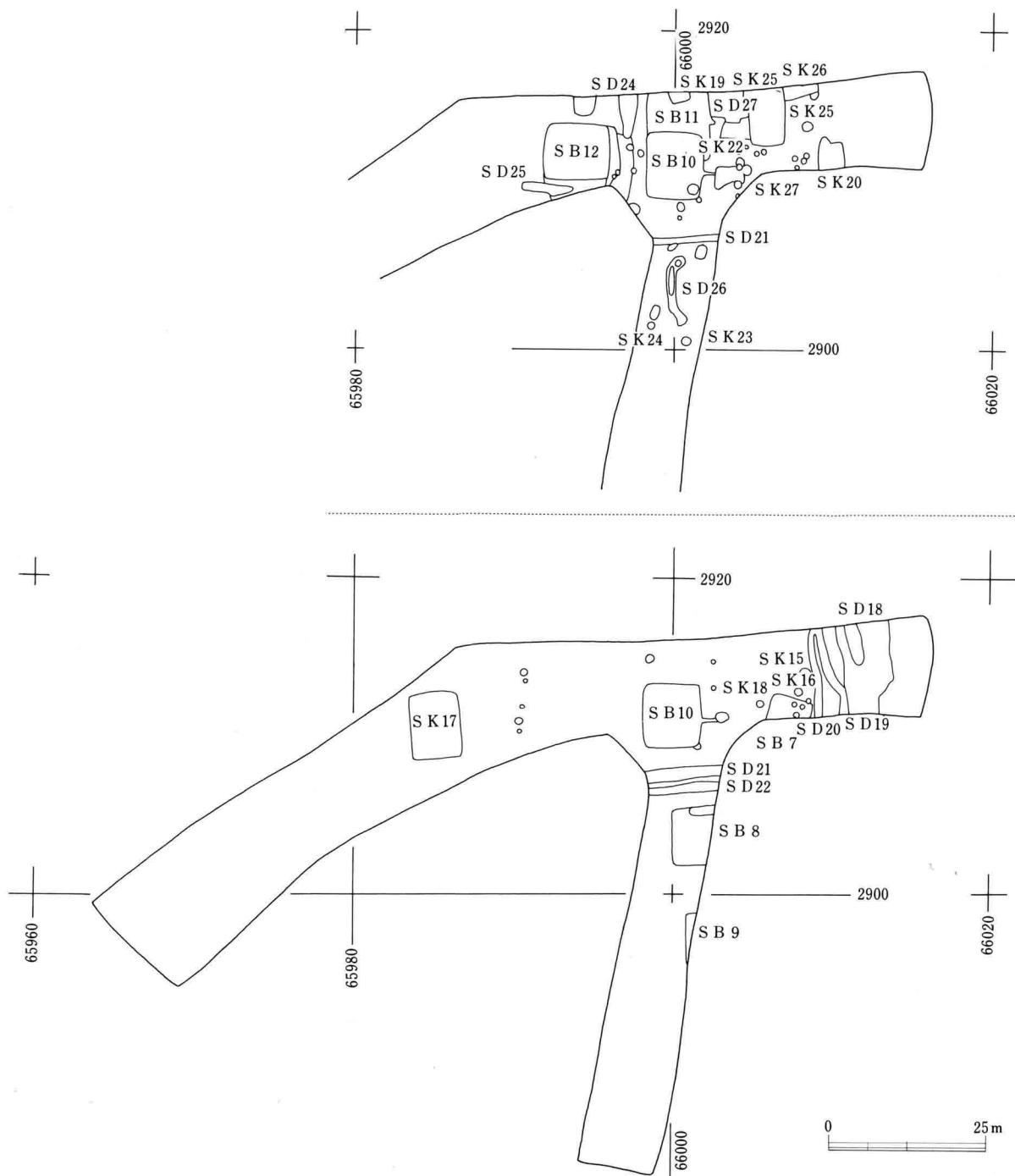
II-2 A地区東端試掘坑土層序



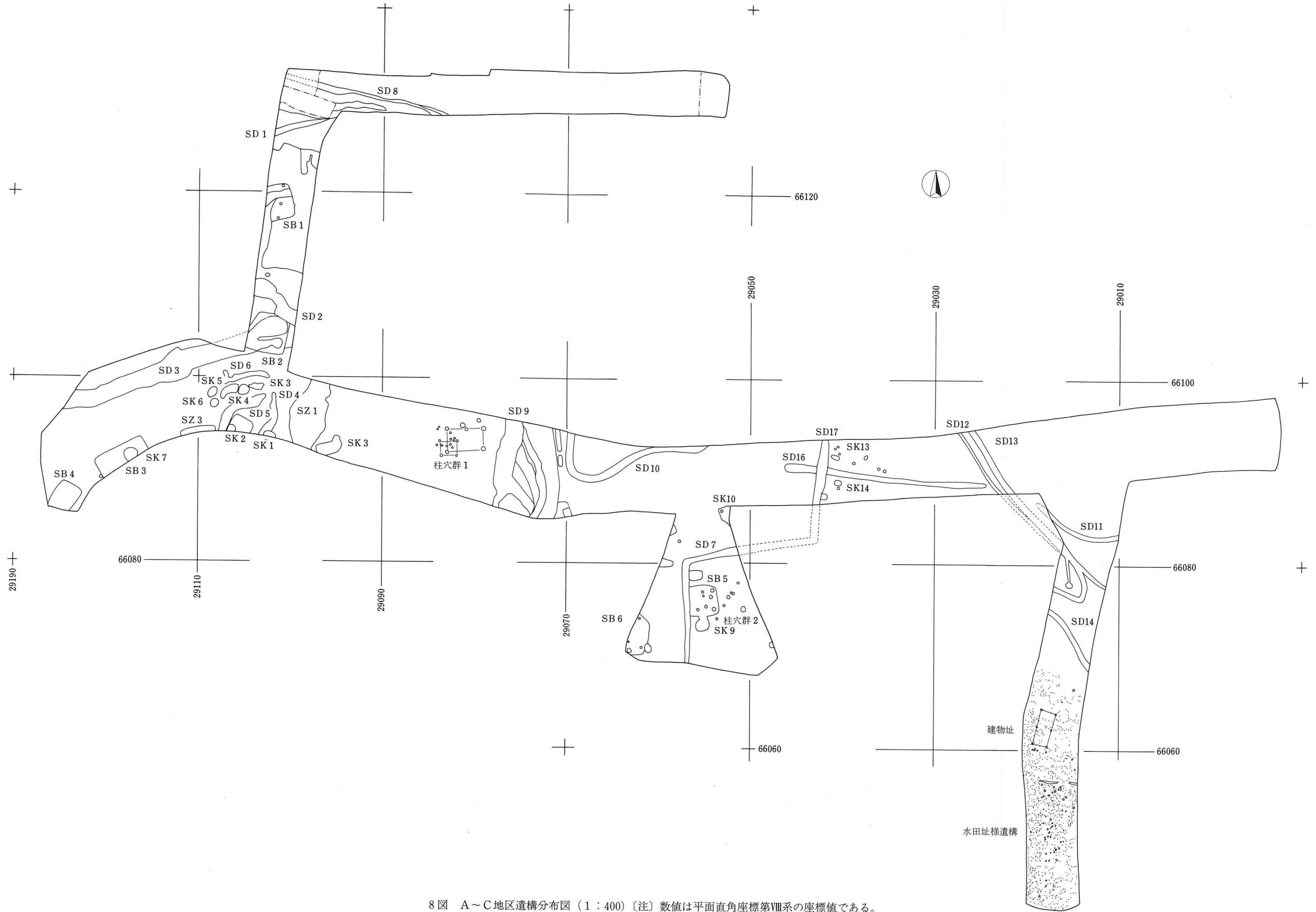
5図 A地区東端試掘坑土層序実測図

3 遺構の分布

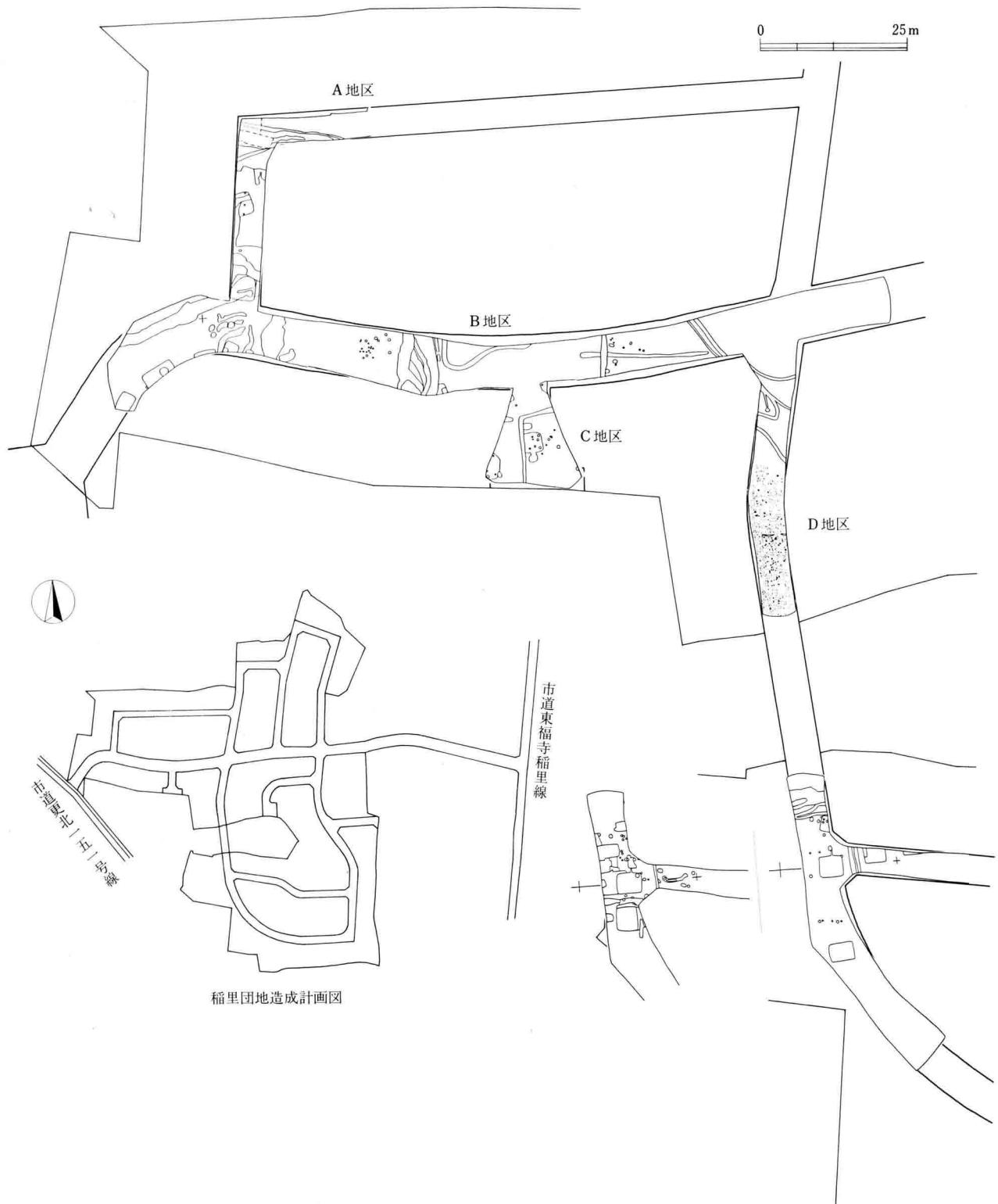
調査での検出遺構は、遺構番号を付したもので住居址12軒、建物址1棟、柱穴群2ヶ所、焼土を伴う溝状遺構1ヶ所(SZ1)、竪穴状遺構(SZ2)、水田址様遺構1ヶ所、土壙27基、溝址27本である。遺構の密集度は、広田沢堰に添った微高地上が最も濃く、それも生活遺構が主体であるのに対し、東へいくに従い溝址が目立つ傾向にある。A地区東端試掘坑に溝状遺構が確認されるが、8号溝址、B・C地区の11号・13号溝址、D地区の17号土壙、E地区の23号土壙を境にしてこれ以東では人為的な落ち込みは認められない。住居址及び同形態遺構は、



6図 D・E地区遺構分布図 (1:400) [注] 数値は平面直角座標第VIII系の座標値である。



8図 A～C地区遺構分布図 (1:400) [注] 数値は平面直角座標第VIII系の座標値である。



7図 開発事業地と遺構分布図（1：1000）

散在的に各地区に認められ、単独検出が多いのに対し、D地区においては遺構面が2層あり、下層面の遺構が重複関係にあるものが多い。土壌は各地区で確認されるが、不整形なものが多く、D地区下層のもの以外は比較的浅い。溝址は地形に沿った流下形態をとるものが多いが、流路としての形態を残す溝址は3号・8号・9号溝址の3本にすぎない。

4 遺構と遺物

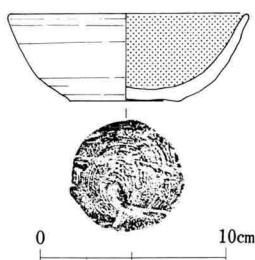
1号住居址

遺構（9図、III-3） A地区南北線の中央付近に位置し、西側半分程と北側の床面は2号溝址により切り取られる。検出面は黄褐色砂質土で、覆土が黒褐色砂質土である。形態は方形を呈するものと推定され、南北3.8mの規模になる。掘り込みは浅く、北壁10cm・南壁8cm・東壁4cm程度にすぎない。床面は平坦で軟弱である。柱穴は直径20cm前後、深さ22cm程度のものが3個確認されたが、主柱穴の配列にならない。カマド等は確認されない。

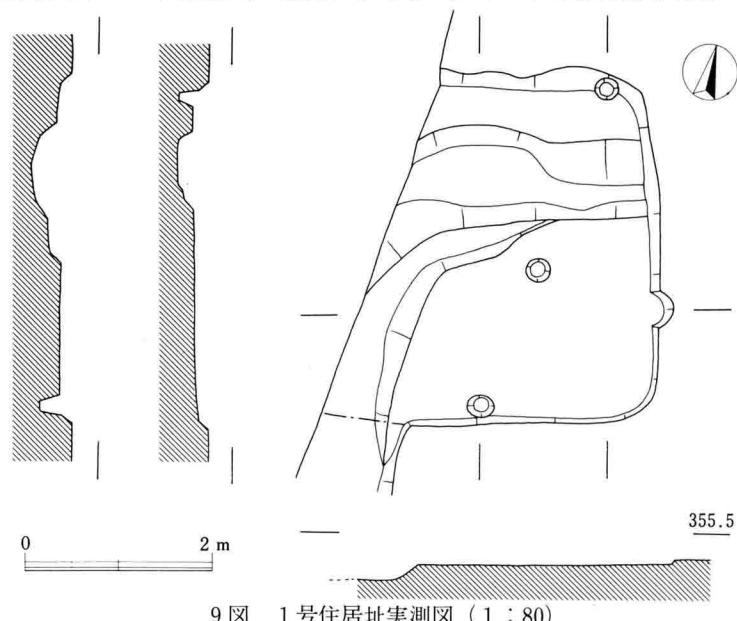
遺物（10図） 出土量は少ない。器種には土師器壺・甕がある。壺は体部に丸味を有し楕円形を呈する。内面にはヘラミガキが施され黒色処理される。底面に糸切り痕を残す。

2号住居址

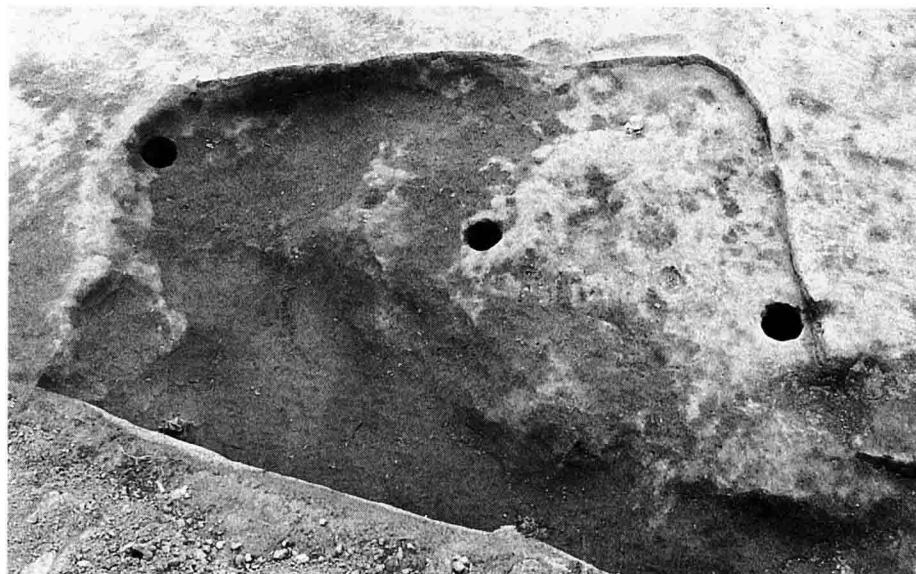
遺構（11図、III-4） A地区の南端に位置し、3号溝址と重複関係にあり、溝址より新しい。形態は長方形を呈し、長軸4.3m、東西2.85mの規模である。長軸方向はN 5°Eを指す。掘り込みは北壁と西壁が傾斜を有しているのに対し他の壁は垂直に近い。北壁32cm・南壁30cm・東壁28cm・西壁30cmを測り、床面は平坦で軟弱である。カマド・柱穴等は確認されなかったが、覆土に炭化物を含む。



10図 1号住居址出土土器実測図 (1:4)



9図 1号住居址実測図 (1:80)



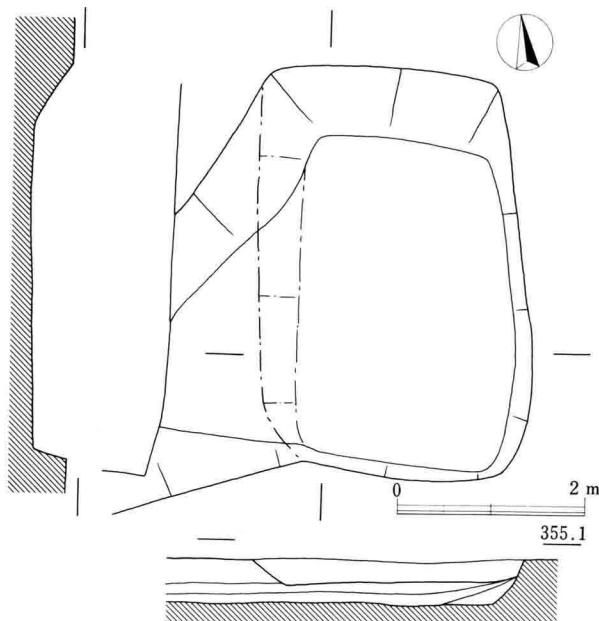
III-3 1号住居址

遺物はすべて覆土からのものである。

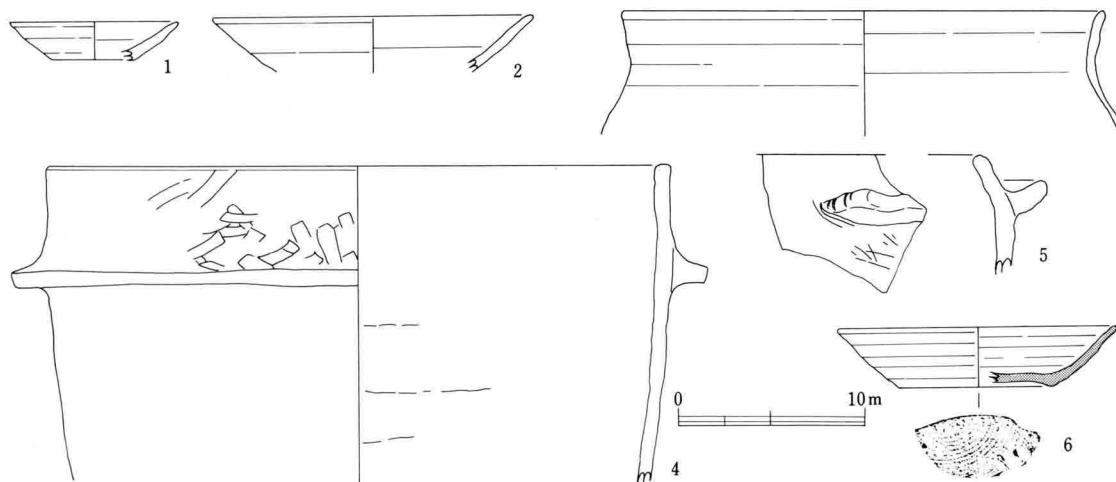
遺物（12図） 出土量は少ない。器種には土師器坏（1・2）・甕（3）・羽釜（4・5）、須恵器坏（6）・甕、灰釉陶器瓶がある。この他に鉄滓1個、羽口片が出土している。土師器坏は大小の形態があり、共に皿形を呈する。甕の体部はヘラケズリにより薄く仕上げられる。羽釜の鍔は全周するものと分離貼付されるものがある。坏や羽釜の様相から土師器甕や須恵器は先行する時期の所産と考えられ、3号溝址に属する可能性がある。

3号住居址

遺構（13図、III-5） B地区の西端に位置し、南側半分程は未調査地に延びる。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、7号土壙を内包している。検



11図 2号住居址実測図（1：80）



12図 2号住居址出土土器実測図（1：4）



III-4 2号住居址

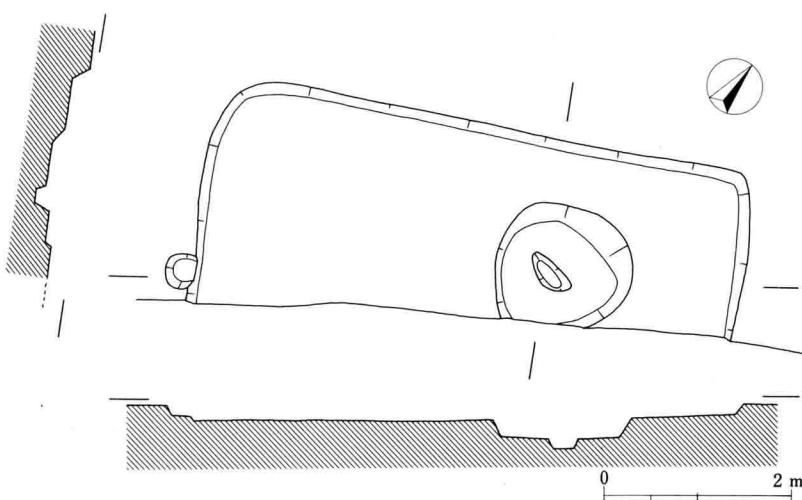
外面は小礫混暗黄褐色砂質土で、覆土は小礫を少量混入する黒褐色砂質土である。東西の規模は5.8mになり、掘り込みは北壁18cm・東壁13cm・西壁19cmを測る。床面は平坦である。覆土に若干の炭化物が認められたもののカマド等は確認されない。

遺物（14図） 出土量は少なく、すべて単独破片出土である。器種には土師器壺・甕（1）、須恵器壺（2）・高台付壺（3）・甕（4）・灰釉陶器碗がある。

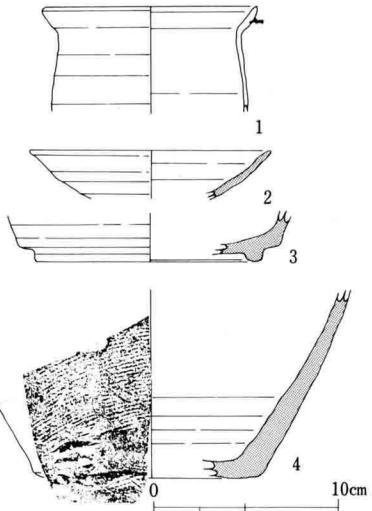
4号住居址

遺構（15図） B地区の南端に位置する遺構であるが、南壁部は未検出である。形態は西壁が内弯する不整長方形を呈するものと思われる。長軸はN30°E方向にあり、3.5m前後の規模になるものと予想する。東西は2.1mで、掘り込みは北壁12cm・東壁10cm・西壁9cmを測る。床面は平坦でやや南へ傾斜する。柱穴・カマド等は確認されない。覆土は黒褐色砂質土である。

遺物（16図） 出土量は少なく、すべて破片出土である。器種には土師器壺（1・2）・甕、須恵器壺（3）・蓋・甕があり、土製品として素焼きの瓦塔基壇（4）と推定されるものがある。壺の底部外面には糸切痕を残し、1の内面はヘラミガキが施こされ黒色処理される。土師器甕の体部外面はヘラケズリ調整である。推定瓦塔基壇は、初層軸を受けたものか上面は平坦になる。ナデ調整によって仕上げられる。暗褐色を呈し、黄雲母を含む。幅3cm～3.5cm、残欠長10.5cm、高さ3.4cmを測る。



13図 3号住居址実測図（1：80）



14図 3号住居址出土土器実測図(1:4)

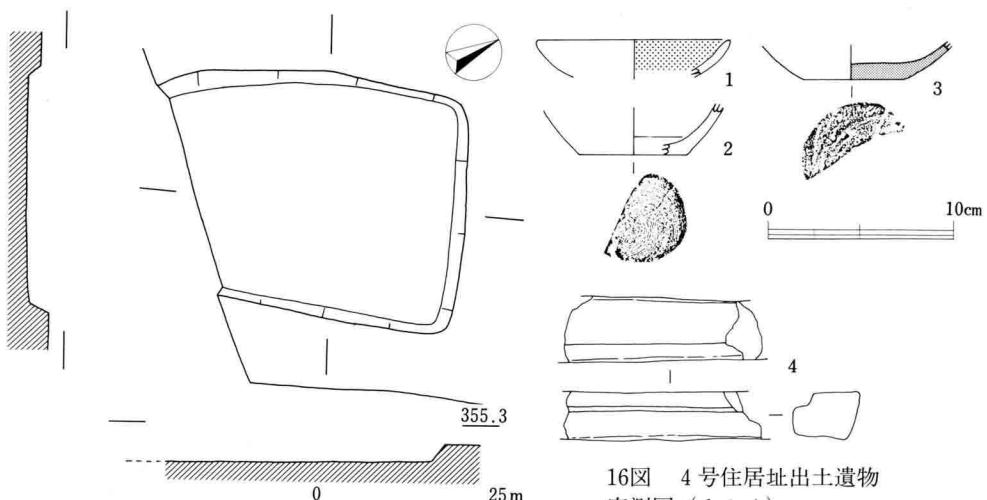


III-5 3号住居址

5号住居址

遺構(18図、III-6)
B調査区中央付近の道路支線内に位置する。
9号土壙と7号溝址と重複関係にあり、西壁部を溝址により切り取られる。形態は隅丸方形を呈し、一辺3.2m前後の規模になるものと推定される。南北軸は

N 8°Wを指す。掘り込



15図 4号住居址実測図(1:80)

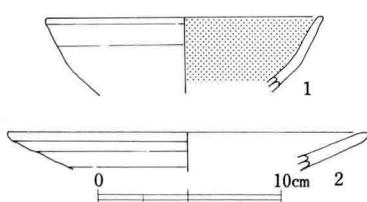
16図 4号住居址出土遺物
実測図(1:4)

みは浅く、北壁11cm・南壁8cm・東壁10cmを測る。床面は平坦・軟弱であり、東へ傾斜する。主柱穴は東壁隅部の2個の柱穴は、主柱穴とも考えられるが、周辺に不規則な柱穴が散在している点から柱穴群としての別遺構の可能性もある。カマドの存在は確認されなかったが、南側の9号土壙と床面レベルが同一であり、住居址に付属する遺構とも考えられる。

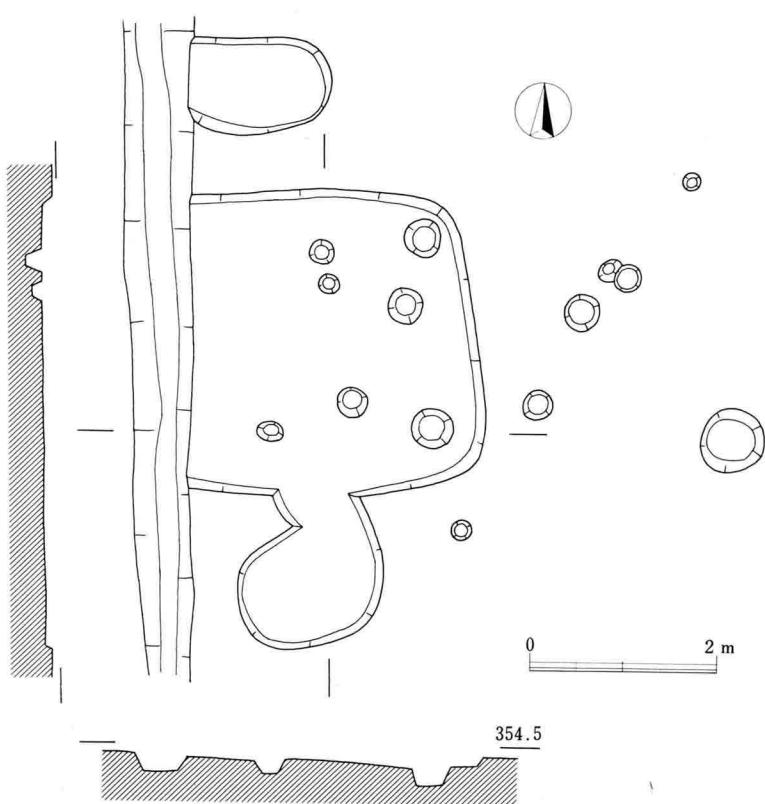
遺物(17図) 出土量は少ない。器種には土師器壺(1・2)・甕、須恵器壺・甕、灰釉陶器碗がある。このほかに鎌の進んだ刀子状の鉄製品が出土している。土師壺の中には全面黒色処理された皿形のものもある。1は内面にヘラミガキが施こされ黒色処理される。2は通常の土師器にはみられない器形で、高台が付された皿形を予想する。灰釉陶器の模倣であろう。内面はヘラミガキである。

6号住居址

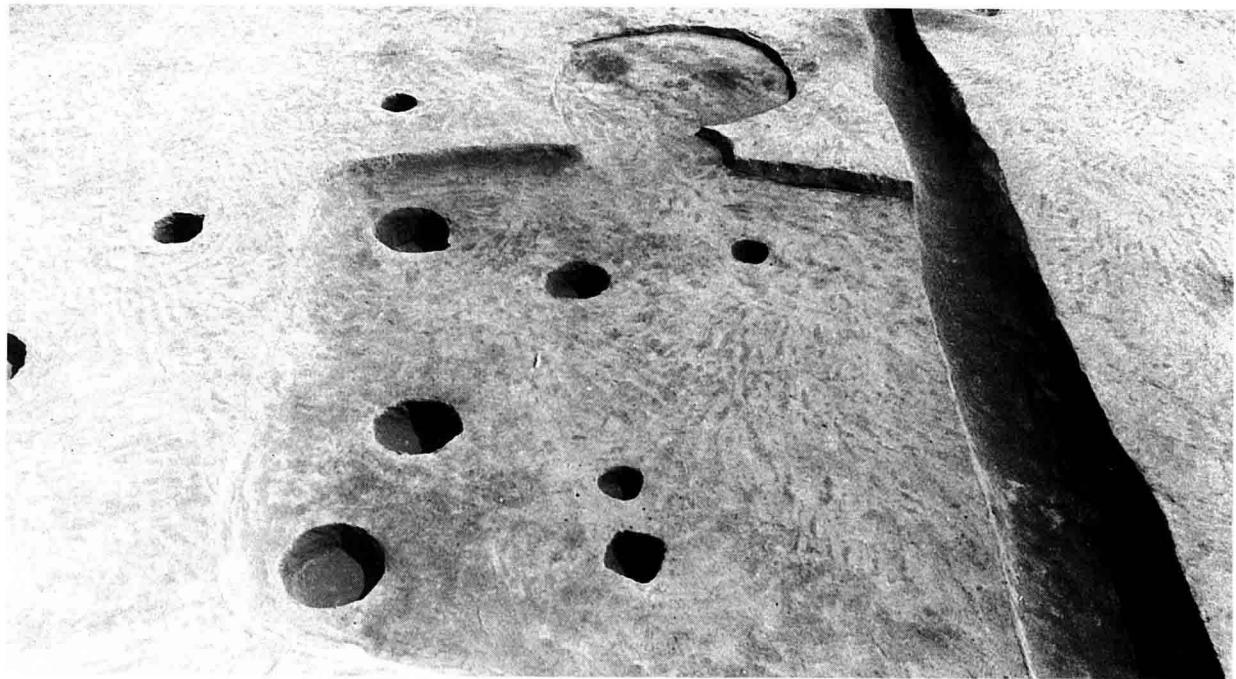
遺構(20図、III-7) B地区中央付近の道路支線内に位置し、単独検出であるが西側半分程は調査対象地外にある。北壁が東壁より大きく張り出していることから、不整隅丸長方形態を推定する。全体の規模は不明であるが、調査での南北壁間の最大検出幅は4.5mを測る。掘り込みの深さは、北壁21cm・南壁17cm・東壁19cmである。床面は南端に直径40



17図 5号住居址出土土器
実測図(1:4)



18図 5号住居址、柱穴群2、9号土壙実測図(1:80)



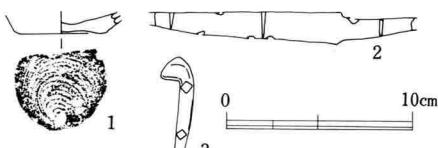
III-6 5号住居址

cm・深さ5cm程の掘り込みがあり、これを中心とし堅緻なものが確認されたほかは軟弱である。この掘り込み内には4個の礫が残存し、炭化物・焼土が認められ、カマド近くの遺構と考えられる。柱穴は大小、深浅なものが各種検出されているが主柱穴配列にならない。南西隅東壁上に長軸1.06m・東西0.77m・深さ51cmの楕円形掘り込みがあり、覆土が同質のものであったので貯蔵穴等の付属施設と考えられる。このほか南東隅に長軸31cm・幅19cmの楕円形を呈する偏平自然石が床面上に置かれており、工作台としての使用法が考えられる。

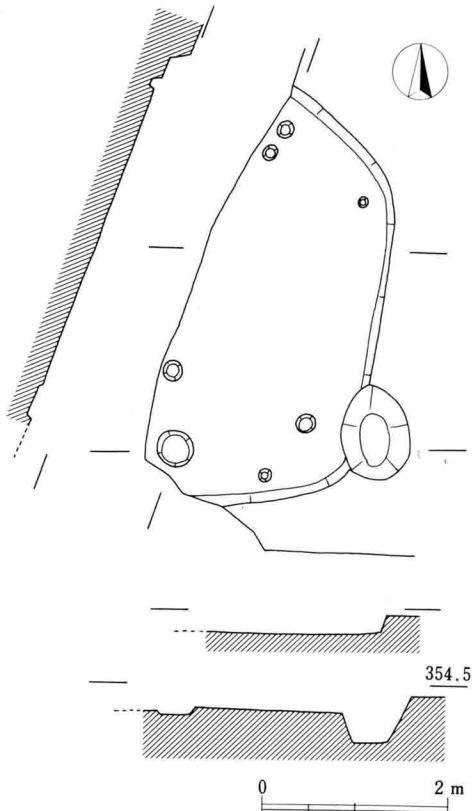
遺物（19図） 出土量は少量にすぎない。器種には土師器壺（1）・甕、須恵器壺・壺、灰釉陶器碗がある。このほか刀子（2）・角釘（3）の鉄製品が出土している。

7号住居址

遺構（22図、III-8） D地区の上面検出遺構の1つで、東側半分程は調査対象地域外へ延びる。形態は隅丸方形と思われ、南北壁間の幅は2.66mを測る。掘り込みは暗黄褐色粘質土からで、覆土は黒褐色粘質土である。北壁11cm・南壁9cm・西壁12cmで、床面は平坦で軟弱である。カマド等は認められない。遺構内に柱穴様掘り込みがあるが、周辺からも同様の落ち込みがみられることから付属遺構ではないものと思われる。柱穴群は建物址としての規格性がなく、規模も最大径67cmから



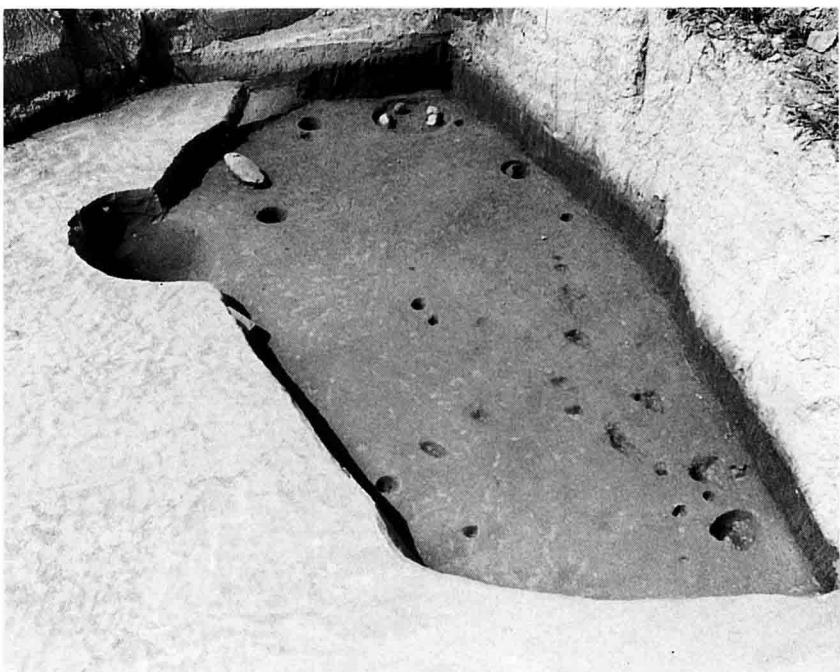
19図 6号住居址出土遺物実測図（1：4）



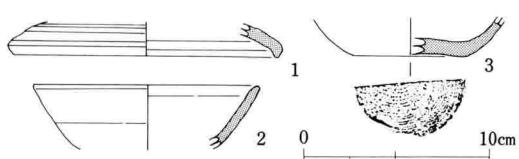
20図 6号住居址実測図（1：80）

の深さ17cmから33cmと様々である。遺物の出土がなく新旧関係は不明であるが、覆土が同質のものであるので時間的にはそれ程差がないと思われる。

遺物（21図） 出土量は少なく、小破片が多い。器種には土師器坏・甕、須恵器坏（2・3）・蓋（1）・甕がある。土師器坏には内面がヘラミガキされ黒色処理されたものが多い。須恵器坏はすべてロクロにより仕上げられ、3の底面には糸切り痕を残す。



III-7 6号住居址

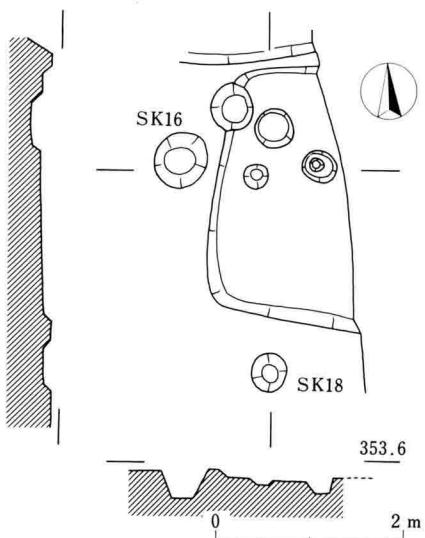


21図 7号住居址出土土器実測図 (1:4)

8号住居址

遺構（24図、III-9） E地区の南側に位置し、23号溝址と重複関係にあり、溝址より古い時期の掘り込みである。調査では南半分程を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われ、東西の規模から一辺3.68m前後になる。掘り込みは南壁26cm・東壁21cm・西壁30cmを測る。床面は平坦・軟弱で、西へ幾分傾斜する。柱穴・カマド等の施設は確認されない。南北軸はほぼ北方向を指す。

遺物（23図） 出土量は少なく、すべて破片出土で全形を知り得る



22図 7号住居地実測図 (1:80)



III-8 7号住居址

ものは須恵器坏1点にすぎない。器種には土師器坏(1・2)・甕(8)、須恵器坏(3~7)・蓋・甕・横瓶がある。土師器坏は内面にヘラミガキが施こされ黒色処理される。1の底部外縁は横方向のヘラケズリが、底部にもケズリ調整痕が認められる。2の底部は糸切離のちヘラケズリによって仕上げられる。甕の体部外面は底部まで縦ヘラケズリ調整である。須恵器坏はロクロによって仕上げられ、底部に糸切り痕を残す。高台が付されるものはない。

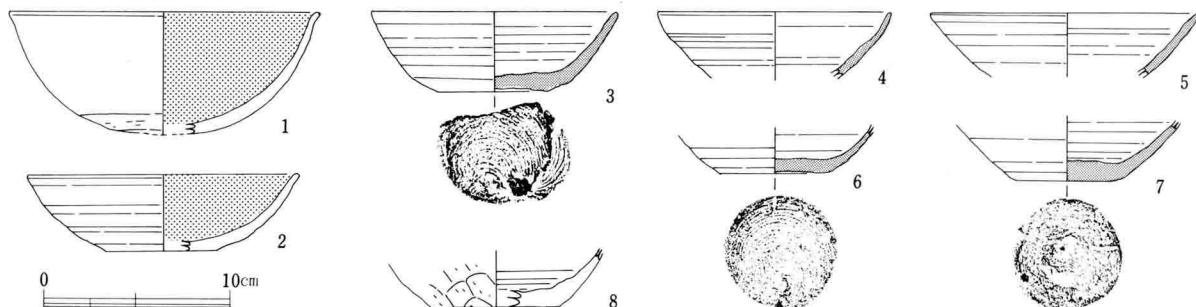
9号住居址

遺構 (25図) E地区の8号住居址の東側に近接する。調査では南壁と南西隅の一部を検出したにすぎず、遺構の大部分は調査対象地外にある。形態は方形を予想するも規模は不明である。掘り込みは南壁・西壁とも19cmを測る。床面は平坦で軟弱である。南北軸は北方向を指す。カマド等の施設は確認されない。

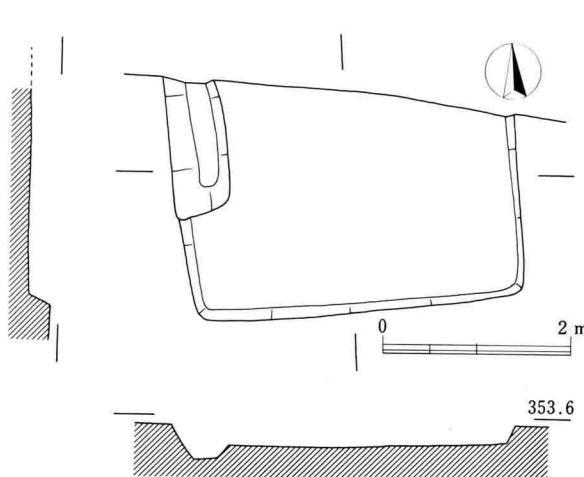
遺物 出土量は少なく、すべて破片出土で図上復元可能なものはない。器種には土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕がある。土師器坏の内面はヘラミガキ調整され黒色処理された土器片が目立つ。土師器・須恵器ともに底部外間に糸切痕を残し未調整である。

10号住居址

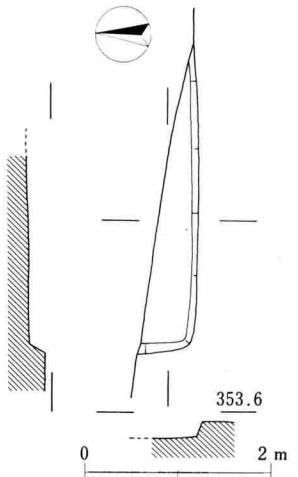
遺構 (26図、III-10) D調査区中央付近に位置し、今回の調査で全容を露呈できた数少ない遺構の1つである。D・E地区上面遺構検出際、何かの遺構が存在することは理解できたが、形態を把握するまでには至らなかった。そこでD・E地区にかけ幅30cm程の試掘坑を設定し、調査を進めたところ上層から約10cmの深さで検出土が暗黄褐色を呈していたものが黄色が幾分強くなり、覆土との色調の差がより明瞭に判別できるようになった。



23図 8号住居址出土土器実測図 (1:4)



24図 8号住居址実測図 (1:80)



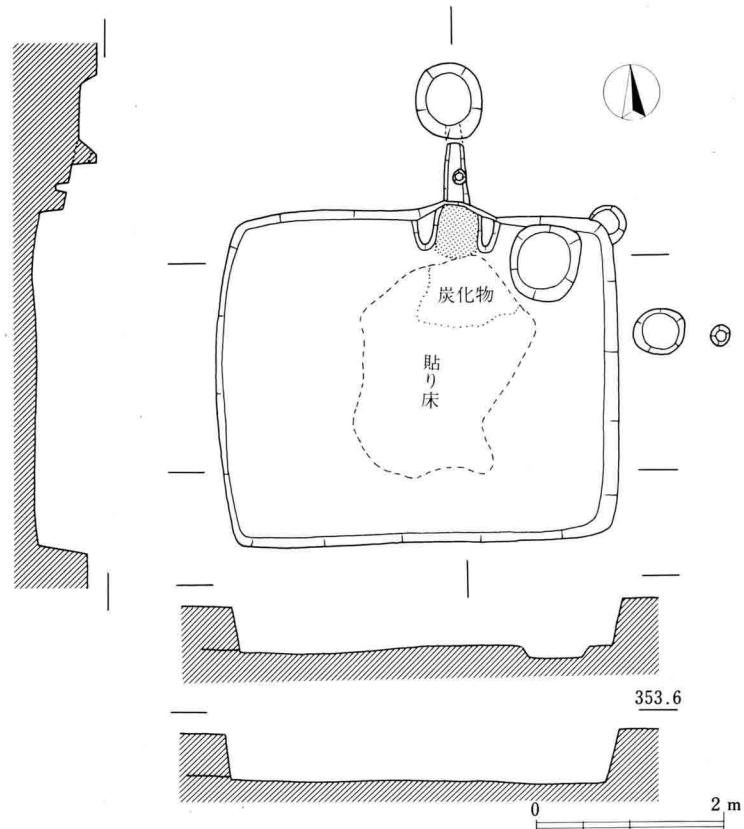
25図 9号住居址実測図 (1:80)



III-9 8号住居址

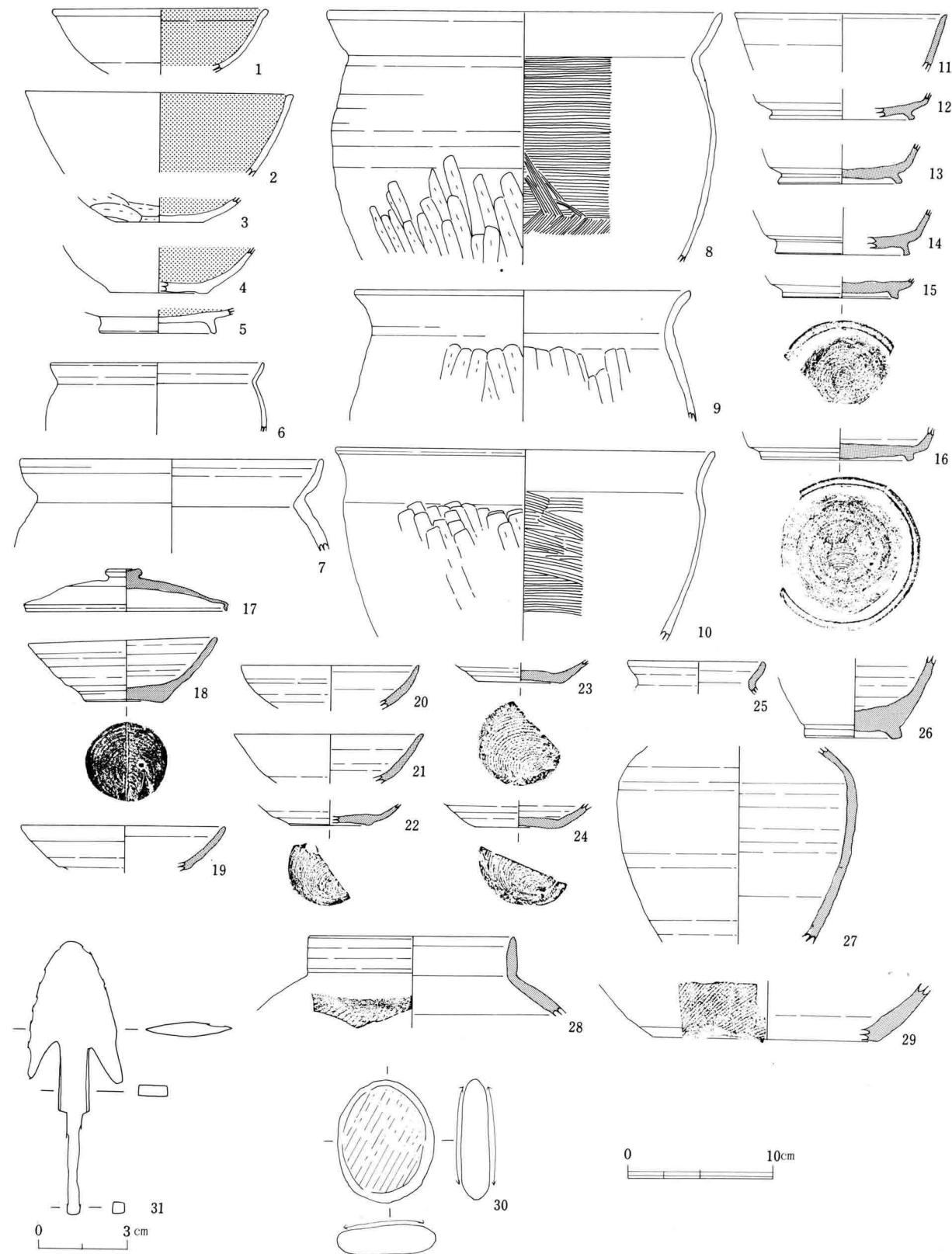
D・E地区全体を重機と人力によりこの面まで除去を試みたところ10号住居址周辺の遺構の存在が明確になってきた。形態は長方形を呈し、西壁は11号住居址と重複関係にある。規模は主軸（南北）3.5m・東西軸4.28mになる。掘り込みは垂直に近く北壁63cm・南壁52cm・東壁52cm・西壁50cmを測り、11号住居址床面との比高差は-3cmである。主軸方向は南北軸を指す。床面はカマド前面及び中央部が若干高まりをみせ、堅緻な貼り床（26図鎖線部）が認められた他は軟弱である。カマドは北壁の中央東寄りに、北壁より張出した形態で構築される。調査では破壊された状態で検出され、粘土製両袖の痕跡と焼土塊化した火床と煙道そしてカマド前面には炭化物が多く残存していた。カマド本体の規模は主軸65cm、内法幅46cmを測る。煙道は65cm程北に延び長軸83cm、短軸72cm、深さ20cmの楕円形を呈する煙出しピットをもって終結する。カマド右側の壁に接して直径70cm前後・深さ15cmの円形土壙があり、貯蔵穴と考えられる。柱穴等他の施設は確認されない。覆土は黒褐色粘質土で11号住居址よりも黒味を帶びる。遺物の出土は覆土からのものが多いが、形態を図示できるもののほとんどがカマド周辺からのものである。

遺物（27図） 出土量は他の遺構のものを凌駕し、総量の6分の1程になる。ただし

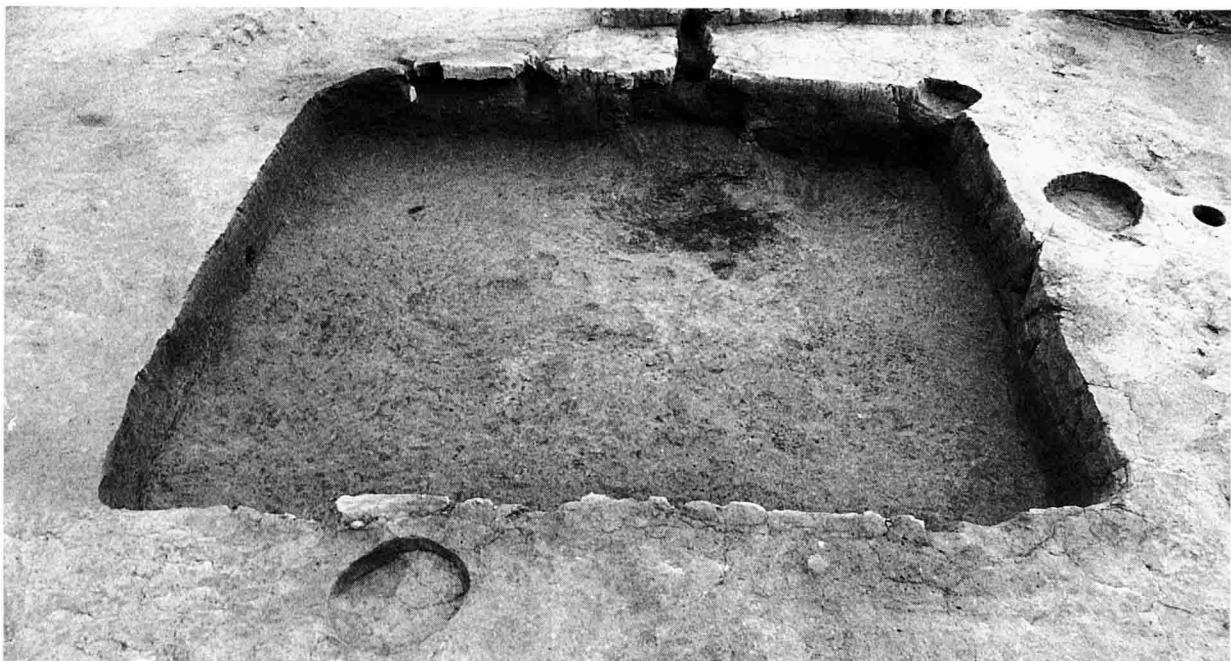


26図 10号住居址実測図（1：80）

完形のものは須恵器坏(18) 1点にすぎず他は破片出土である。器種には土師器坏(1~4)・椀(5)・甕(6~10)、須恵器坏(18~24)・高台付坏(11~16)・蓋(17)・壺(25~27)・短頸壺(28)・甕(29)がある。この他に鉄鎌(31)・刀子・釘・鉄滓・磨石(29)がある。土師器坏・椀類の内面は黒色処理されたものが多い。3の底部付近はヘラケ



27図 10号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)



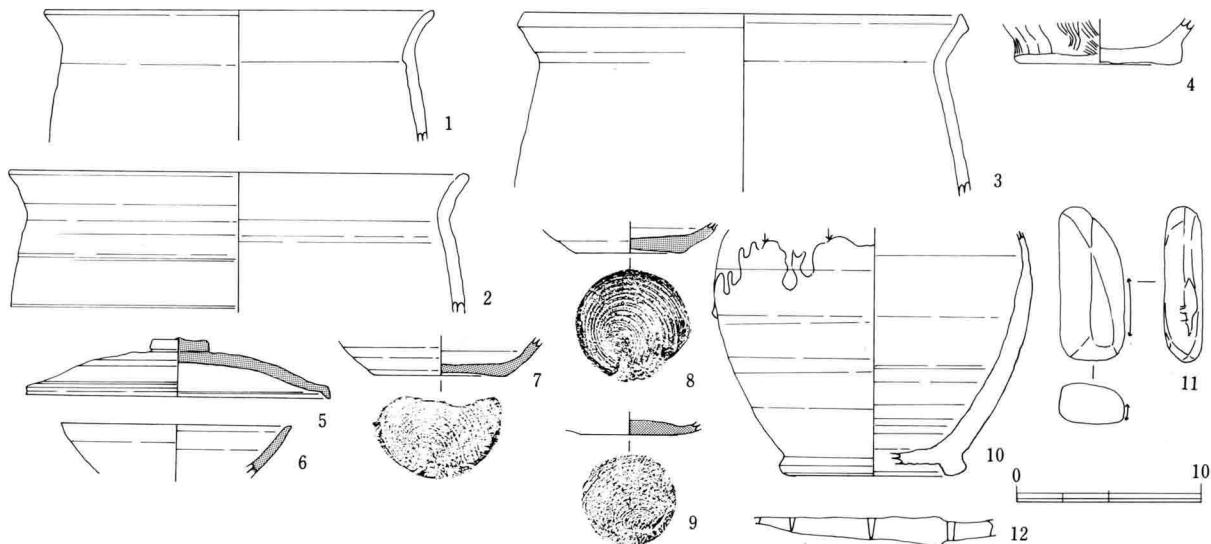
III-10 10号住居址

ズリが施こされる。甕には大小の器形があり、口縁部形態も内弯気味に立ち上がるもの(6~8)と外反するもの(9・10)があり、10は最大径が口縁部にあり鉢形を呈する。体部調整はロクロナデであるが、大形のものは底部にかけて縦ヘラケズリ・ナデによって再調整が施こされる。内面は8・10がハケ調整、9はヘラナデ調整である。須恵器はロクロによって仕上げられ、坏類はロクロからの切離が糸切りによっているが、高台付坏では底部から外縁にかけ回転ヘラケズリを施こした後、高台が付される。鉄鎌は三角形を呈し、茎部を欠損している。磨石は偏平楕円形を呈し両面に擦痕を残す。

11号住居址

遺構（28図、III-11） D地区中央付近にあり、北壁及びカマド上面を22号土壙に、東壁側を10号住居址に切り取られる。また西壁は調査対象地外にあり、上面に9号土壙を内包する。形態は隅部が若干丸みを帯びる方形を呈するものと思われる。規模は南北3.92mで、東西が北壁の両隅部が確認されるので4.2m前後になるものと推定する。掘り込みは垂直に近く北壁52cm・南壁49cmを測る。主軸方向は南北を指す。床面は平坦でカマド前面から南壁にかけての中央付近は堅緻な貼り床になる他は軟弱である。カマドは北壁中央より西寄りに構築され、残存形態から粘土製両袖形のものである。カマドの規模は主軸50cm・内法幅40cm前後のものと推定され、内部には焼土、土師器甕片が埋っていた。煙道は傾斜を持って突出するが上部を22号土壙に掘り込まれているため詳細は不明である。床面中央の南壁寄りに工作台であろう長軸30cm程の偏平石が据え置かれていた他には、柱穴等の施設は確認できなかった。遺物はカマド周辺からの出土が多い。

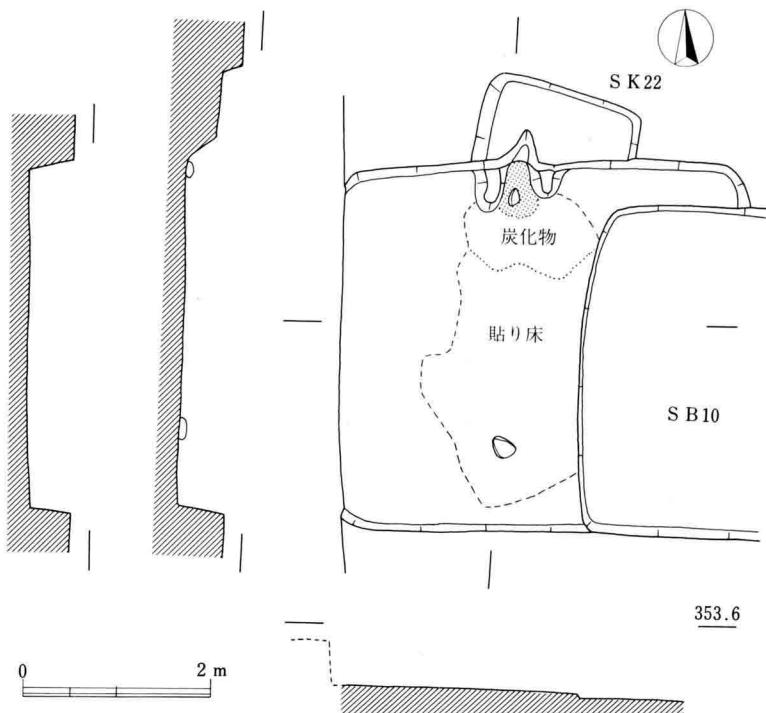
遺物（29図） 出土量は少なく、すべて破片出土である。器種には土師器坏・甕（1~4）、須恵器坏（6~9）・蓋（5）・壺（10）・甕がある。この他に狭長自然石の側面を使用した敲打器（11）、刀子（12）が出土している。土師器坏には内面黒色処理されたものが目立つ。甕は大形品で、ヘラナデ・ナデ調整で仕上げる。口縁部は外反し、3の端部は面取りされ嘴状になる。須恵器はロクロにより仕上げられ、坏底部に糸切り痕を、10の肩部には自然釉がかかる。刀子は使用により刃部が細身内弯化する。



29図 11号住居址出土実測図 (1 : 4)

12号住居址

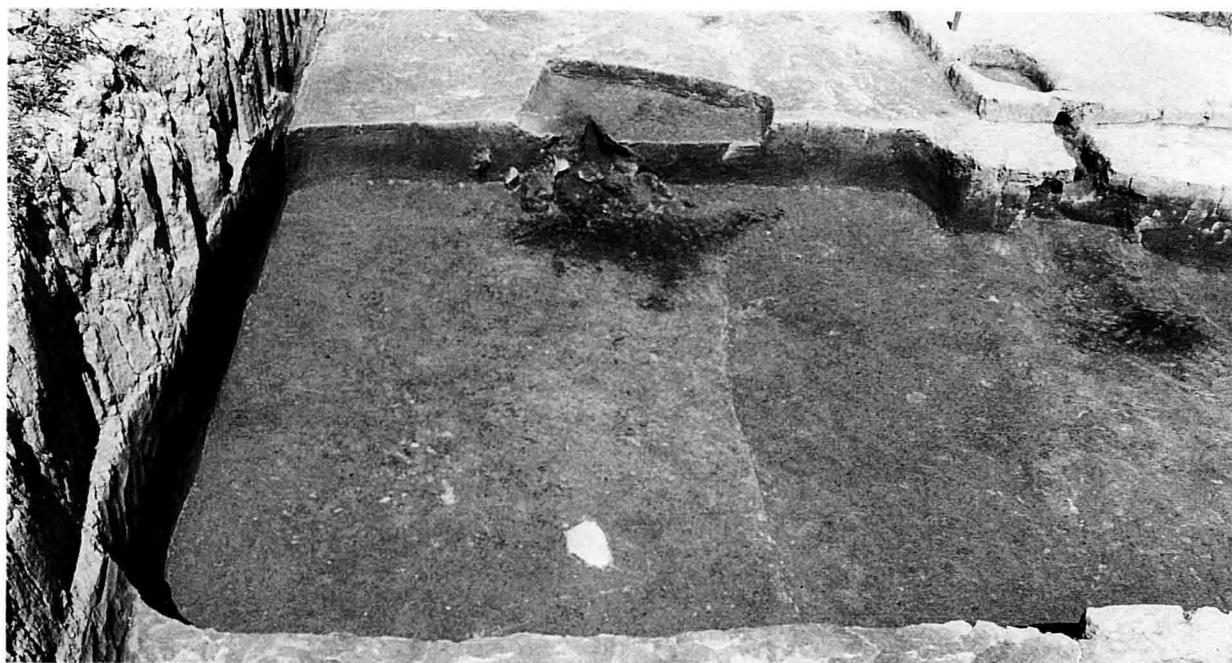
遺構 (30図、III-12) D地区下層南端に位置し、遺構全面を露呈検出した。住居址北側に住居址形態の壁状を呈する2段の浅い掘り込み、東側にも同様落ち込みが認められ、上層面に住居址様遺構が存在し、それらと重複関係にあった可能性が高い。形態は西壁の両隅が丸味を有するのにたいし、東壁側は直角に近い不整長方形を呈する。主軸は南北軸方向を指し、南北4.15mを測り、東西3.4mの規模になる。検出面からの掘り込みは南壁38cm・西壁41cm、重複遺構面から北壁30cm・東壁32cmである。床面はカマド前面より南壁に



28図 11号住居址実測図 (1 : 80)

かけ中央付近が若干の高まりをみせ、この部分のみ堅緻な貼り床である。カマドは北壁中央より西に偏して構築され、調査では粘土製両袖の一部と焼土・火床及びカマド前面の炭化物を検出したにすぎない。煙道は上面の遺構によって掘り込まれたらしく確認できなかった。柱穴等の施設はない。

遺物 (31図) 出土量は10号住居址に次いで多いが、破片でのものである。器種には土師器壺(1・2)・甕(3・4)、須恵器壺(7~17)・高台付壺(18~21)・蓋(5・6)・長頸壺(22・23)・甕(24)がある。この他に敲打器が出土している。須恵器が主体となる土器群で、図示可能な土師器壺は2点にすぎない。土師器甕の破片量も少なく、ほとんどがカマド内及び周辺からの出土である。2の壺の体部は内外面ともヘラミガキが施され黒色処理される。土師器甕の調整はナデによっている。須恵器はすべてロクロにより仕上げられ、壺類のロクロからの切離は糸切りによる。壺には高台が付されるが欠損している。9には墨書きが認められる。



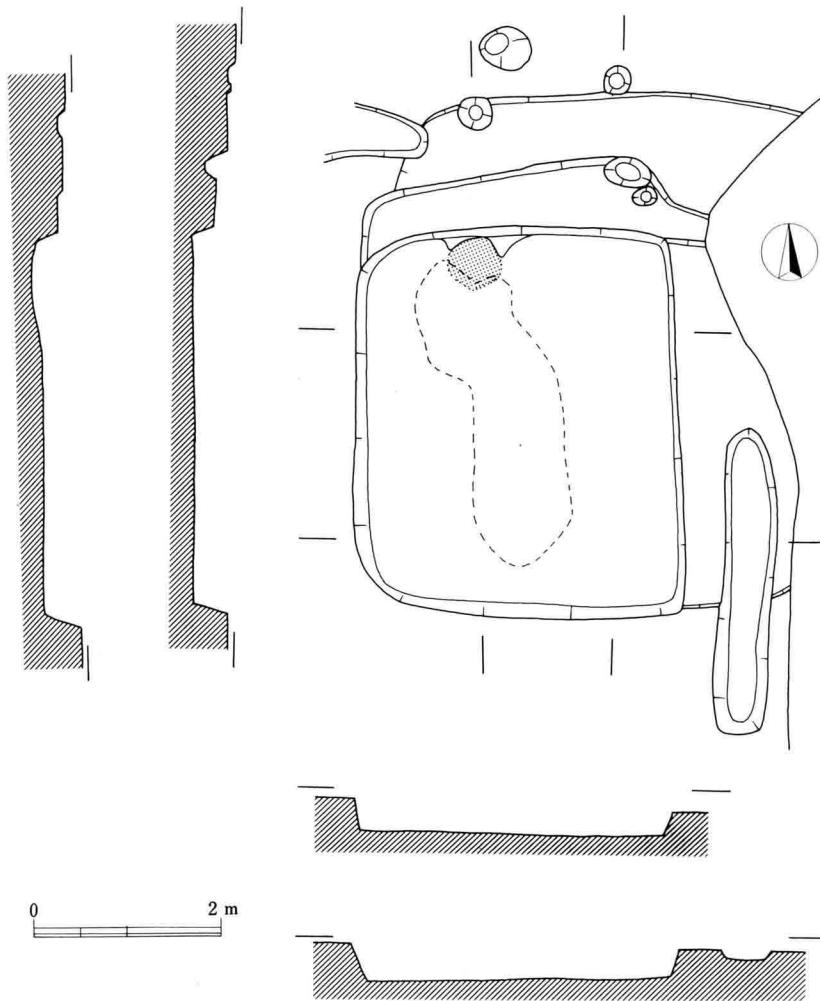
III-11 11号住居址、22号土壤

建物址

遺構（32図、III-15） C地区中央付近に位置し、水田址様遺構内にある。直径20cm～26cm、深さ25cm～30cmの掘り込みで、1間×2間の長方形を呈する掘立柱建物址を予想する。長軸はN17°Eを指し、3.82mを測る。短軸は1.7m前後になる。遺物の出土はなく、水田址様遺構、15号溝址との前後関係は不明である。遺物の出土はない。

柱穴群1

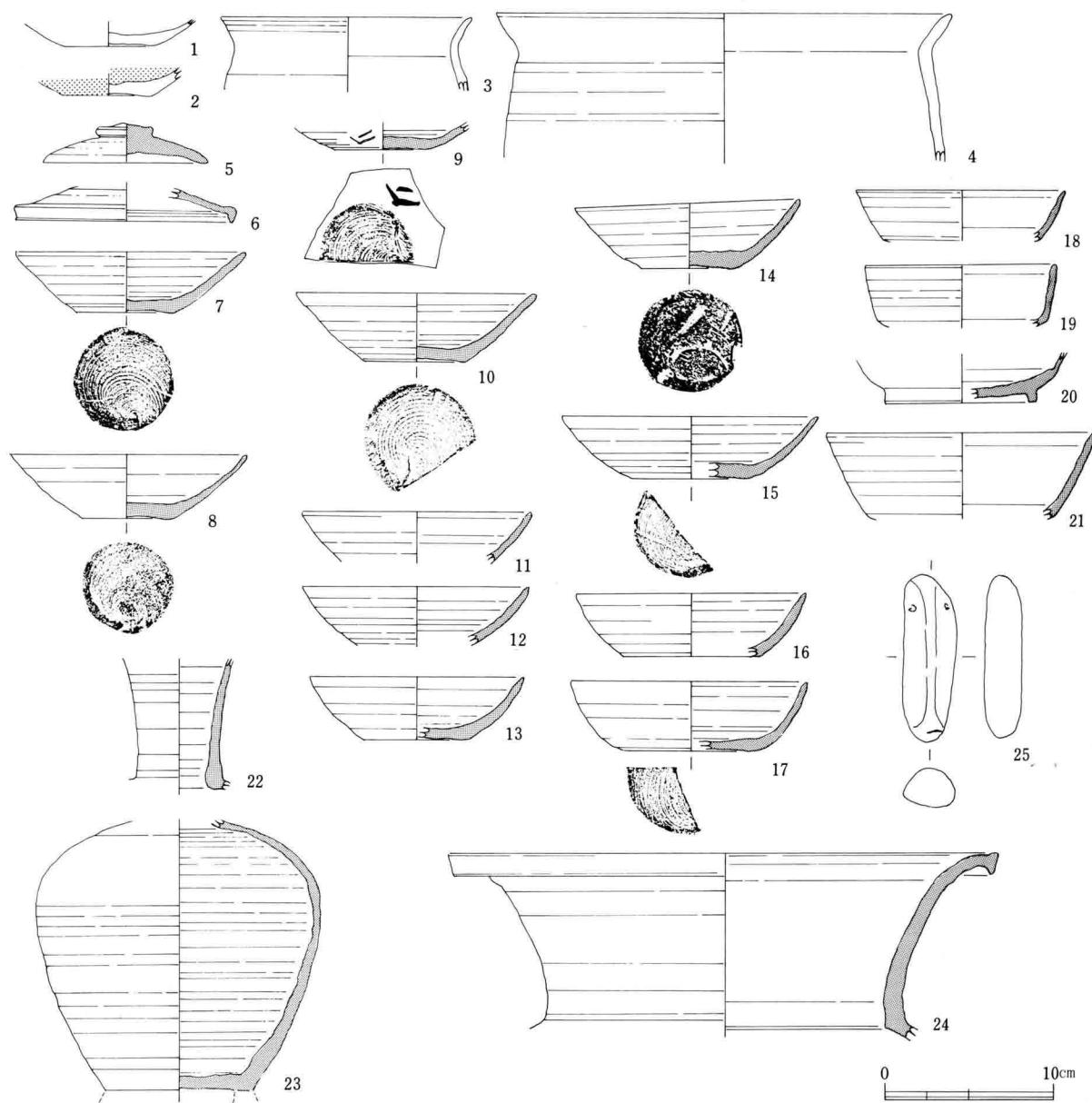
遺構（33図、III-13） B地区的9号溝址の西側に散在する柱穴をもって構成する。柱穴の規模は直径14cm～60cm、深さ12cm～25cmである。直径30cm以上の柱穴で建物址配列を有するものは1棟分見い出すことができ、4個長方形を呈する。長軸3.95



30図 12号住居址実測図



III-12 12号住居址



31図 12号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)

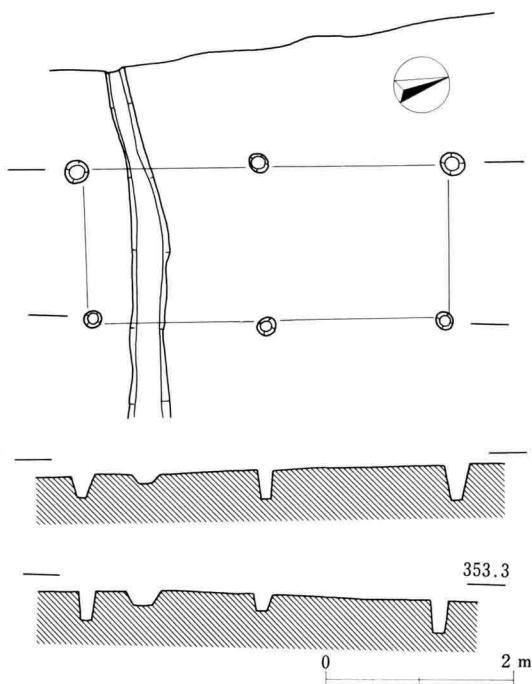
m・短軸2.41mを測り、短軸方向はほぼ南北軸線上にある。直径20cm内外の小形のものは南側に集中して点在し、建物址配列をなすものは1棟分で、1間×1間のものである。南北1.84m・東西1.6mの規模で、南北方向は南北軸を指す。大形のものと小形のものとの前後関係は不明である。

遺物 土師器坏・甕の小破片が数点出土しているにすぎない。

柱穴群2

遺構 (18図、III-14) B地区中央付近の幹線支道内に位置し、5号住居址の内外に散在する。直径22cm~70cm、深さ13~28cmを測る大小の柱穴様ピットをもって形成するが、建物址配列になるものは見い出せない。

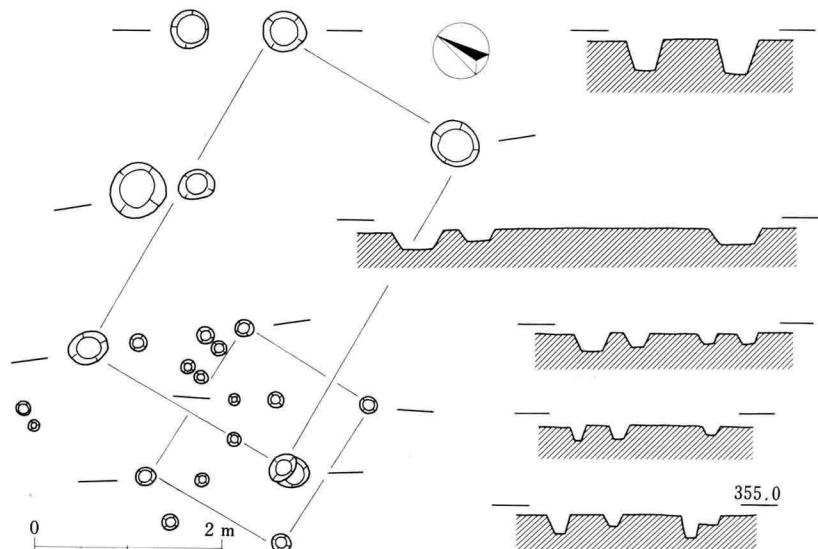
遺物 土師器坏・甕、須恵器坏の小破片が各1点出土しているにすぎない。



32図 建物址実測図 (1:80)

その他の柱穴群

遺構 B地区の16号溝址周辺から直径20~30cmの柱穴様ピットが6個検出されているが、建物址配列にならない。D地区の上面の7号住居址周辺から土壙状のものを含め7個確認され、10号住居址周辺にも4個点在するが規格性をもたない。17号土壙の北側に大小5個のほぼ直列する柱穴群を検出したが、用途は不明である。下面では27号土壙を含め7個以上の柱穴を確認したが建物址配列にはならない。

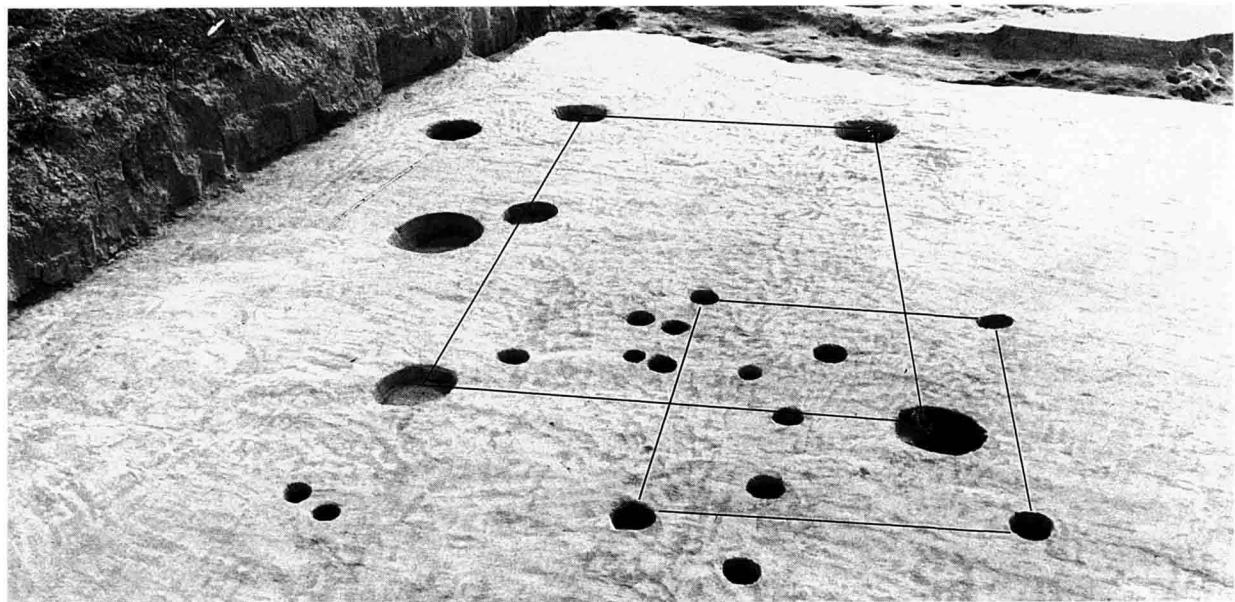


33図 柱穴群1実測図 (1:80)

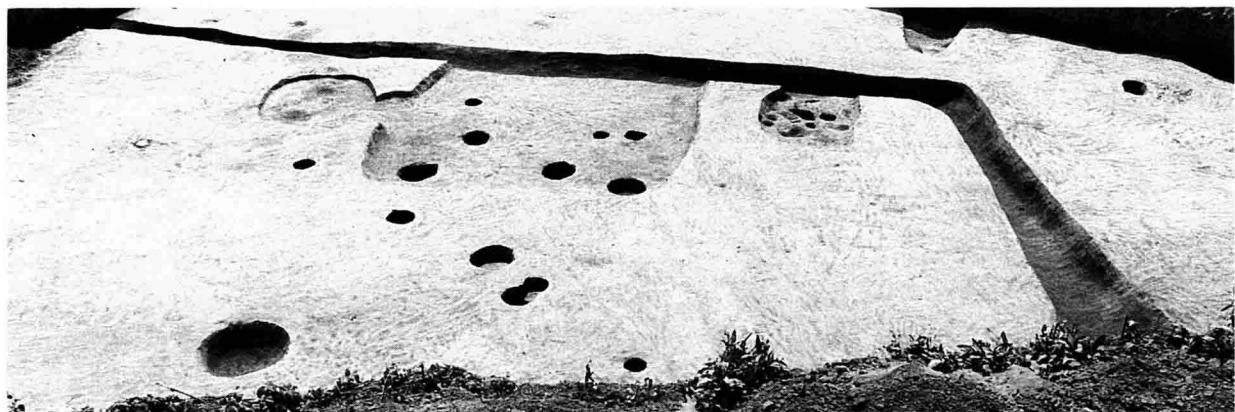
焼土を伴う溝状遺構 (S Z 1)

遺構 (36図) B地区の西側に位置し、南北の不整形溝状形態になる。掘り込みは浅く6cm~8cm程で、底面は若干の凹凸を有し軟弱である。東西の最大幅は4.0mを測る。焼土は4ヶ所から確認され、そのうちの3ヶ所は直径30cm前後、深さ5cmの円形ピットになる。生活跡としての性格を有するものと思われるが、用途は不明である。

遺物 (34図) 出土量は少ない。器種には土師器坏(1)・甕がある。坏は小形の皿形のもので、ロクロ成形であり、内外面にロクロメを残し、カワラケに近い様相がうかがわれる。



III-13 柱穴群 1

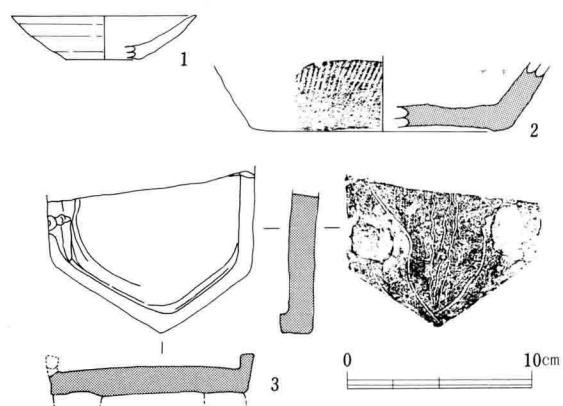


III-14 柱穴群 2

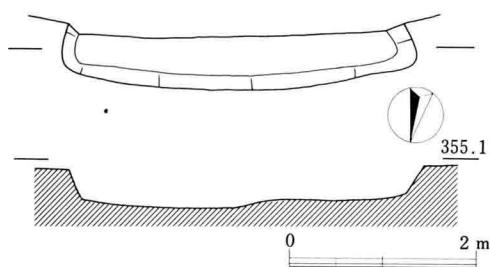
豊穴状遺構 (S Z 3)

遺構 (35図) B地区の西端の遺構群の一つで、調査では北壁部のみ検出した。住居址形態とも思われるが、東・西壁の内傾度から溝状の形態も予想される。東西3.8mの規模で、掘り込みは東西壁32cmを測る。底面は東側半分程が舟底状を呈し深くなる。覆土は他の遺構より黒味の強い砂利混り黒褐色を呈する。炭化物の包含も比較的多い。

遺物 (33図) 遺物の出土量は調査面積に対して比較的多いが、すべて破片である。器種には土師器壊、須恵器壊・蓋・甕(2)、灰釉陶器碗がある。このほかに須恵質の硯(3)が出土している。硯は五角形を呈するものと思われ、脚が付される。裏面には意味不明の線刻画が描かれる。また左側破損部には焼成前の意図不明の円形を



34図 焼土を伴う溝状遺構(1)、豊穴状遺構(2・3)出土遺物実測図



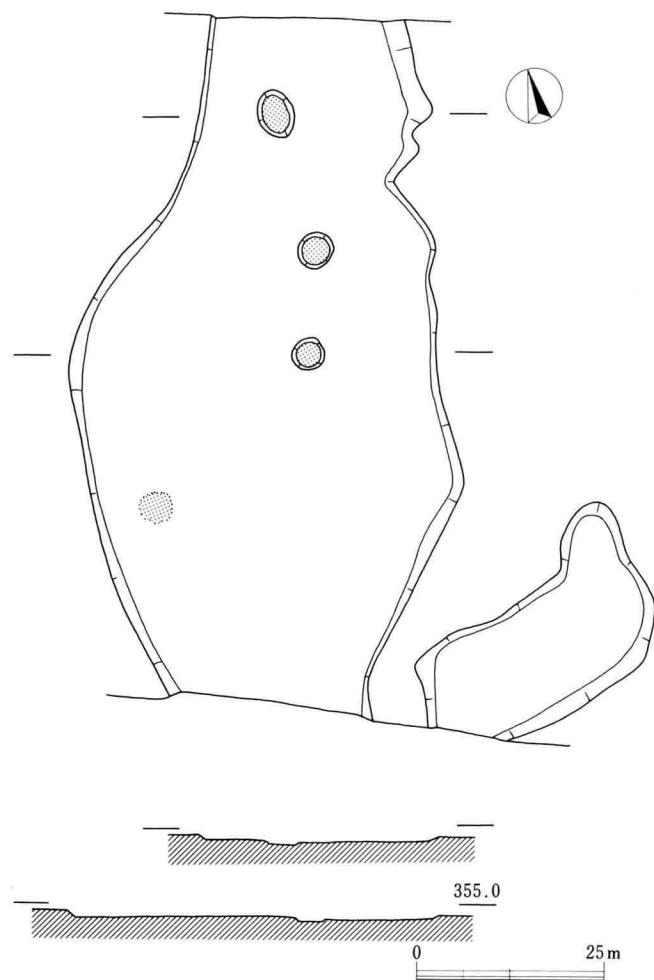
35図 堪穴状遺構実測図 (1 : 80)

呈する穿孔も認められる。須恵器甕は底部付近までタタキメが見られ、底部外縁はヨコナデにより調整される。底部は上底状を呈し、ヘラナデにより仕上げられている。

水田址様遺構

遺構 (38図、III-15、16) C地区の中央から南にかけて展開する遺構である。北側の検出面が暗黄色粘質土を呈し、序々に南へ沈み込み、その凹上部を黒褐色粘質土が覆うような自然地形遺構である。水田址様と形容したのは、この凹地全面から直径10cmに満たない円形・不整円形を呈する小ピットが多数確認され、稻株の痕跡ではないかと推定したためである。ただ深さ20cmにも及びものもあり、稻株痕としては深すぎるくらいもある。稻株痕とすれば、長軸20cm前後の円形・不整形の大きな深い穴は抜根の際の所産とも考えられる。少なくとも覆土上面からは確認されていないこと、深さが5cm~10cmと浅く柱穴とは考えられない。稻株様ピットは覆土が厚い部分に多く確認され、北側の深い部分が減少する傾向から、東側及び南東隅からの検出が少なく、検出面が南端では上昇傾向にあることを考慮すれば、水田址様遺構は西側に展開するものと思われる。また不規則に散在するあり方は、田植作業の結果ではなく、直播のためと考えられる。15号溝址を境に南側が稻株様ピットが濃密に分布していることから一時期この遺構が水田址を区画していた可能性もある。

遺物 出土量は少量にすぎず、それも小破片出土であり、図上復元可能なものはない。器種には土師器壊(内黒)・甕、須恵器壊・甕・壺、灰釉陶器瓶がある。この他に黒曜石の小片が1点出土している。



36図 焼土を伴う溝状遺構実測図 (1 : 80)

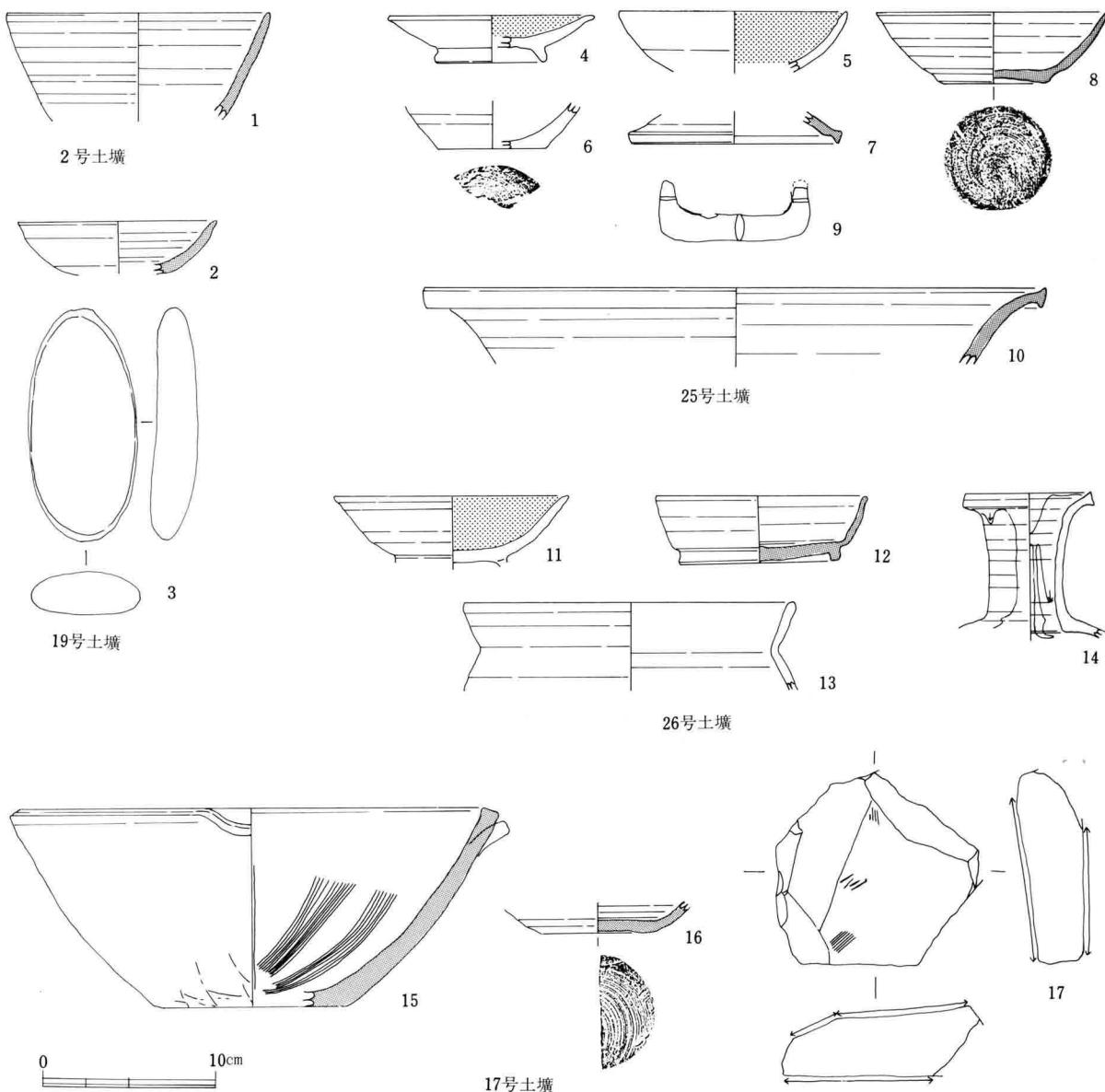
土壙

柱穴様形態をとらず、規模の大きな掘り込みで、用途不明なものが多い。その中で特色ある土壙を抽出する。出土遺物から大部分の土壙は平安時代の所産と考えられるが、17号溝址は中世に属する。

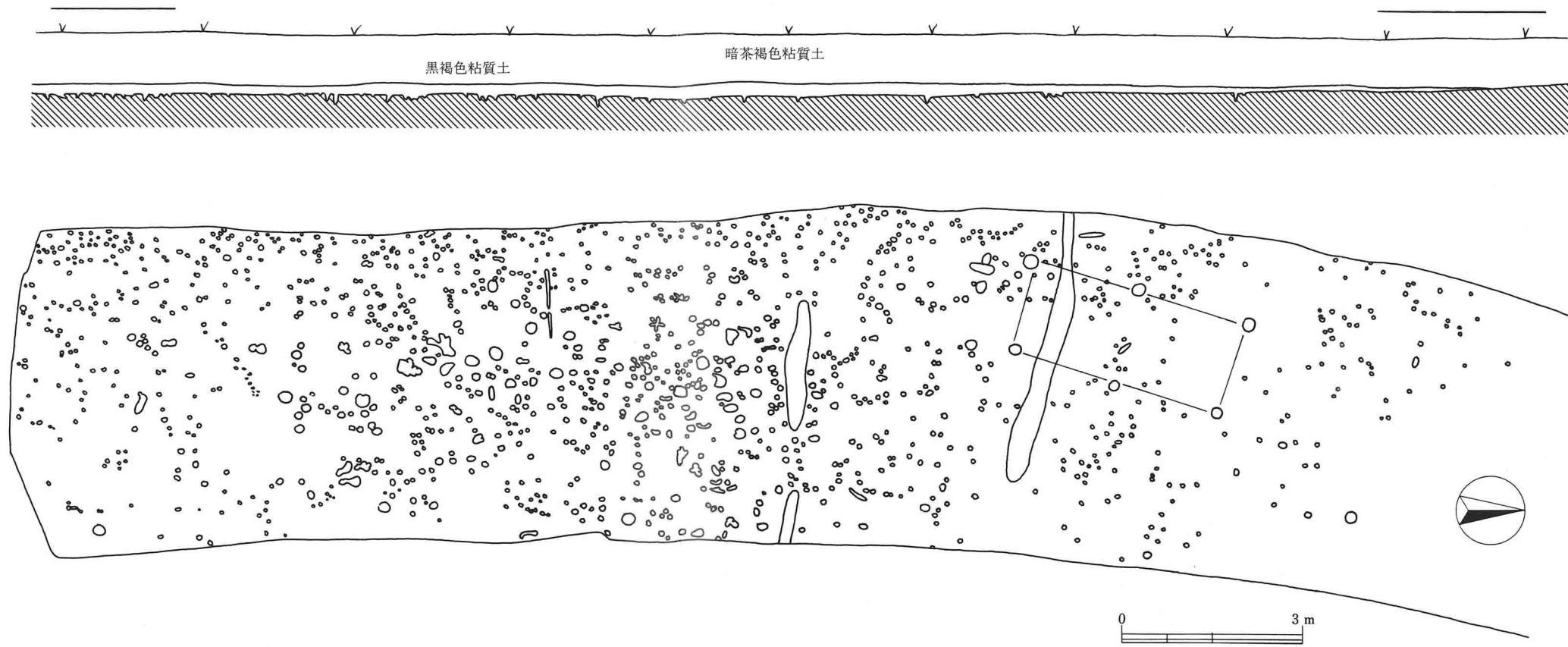
9号土壙 5号住居址に南接する。浅い円形の掘り込みであるが、覆土に多量の炭化物を含む、底部は焼土が認められた。5号住居址の付属施設とも考えられる。

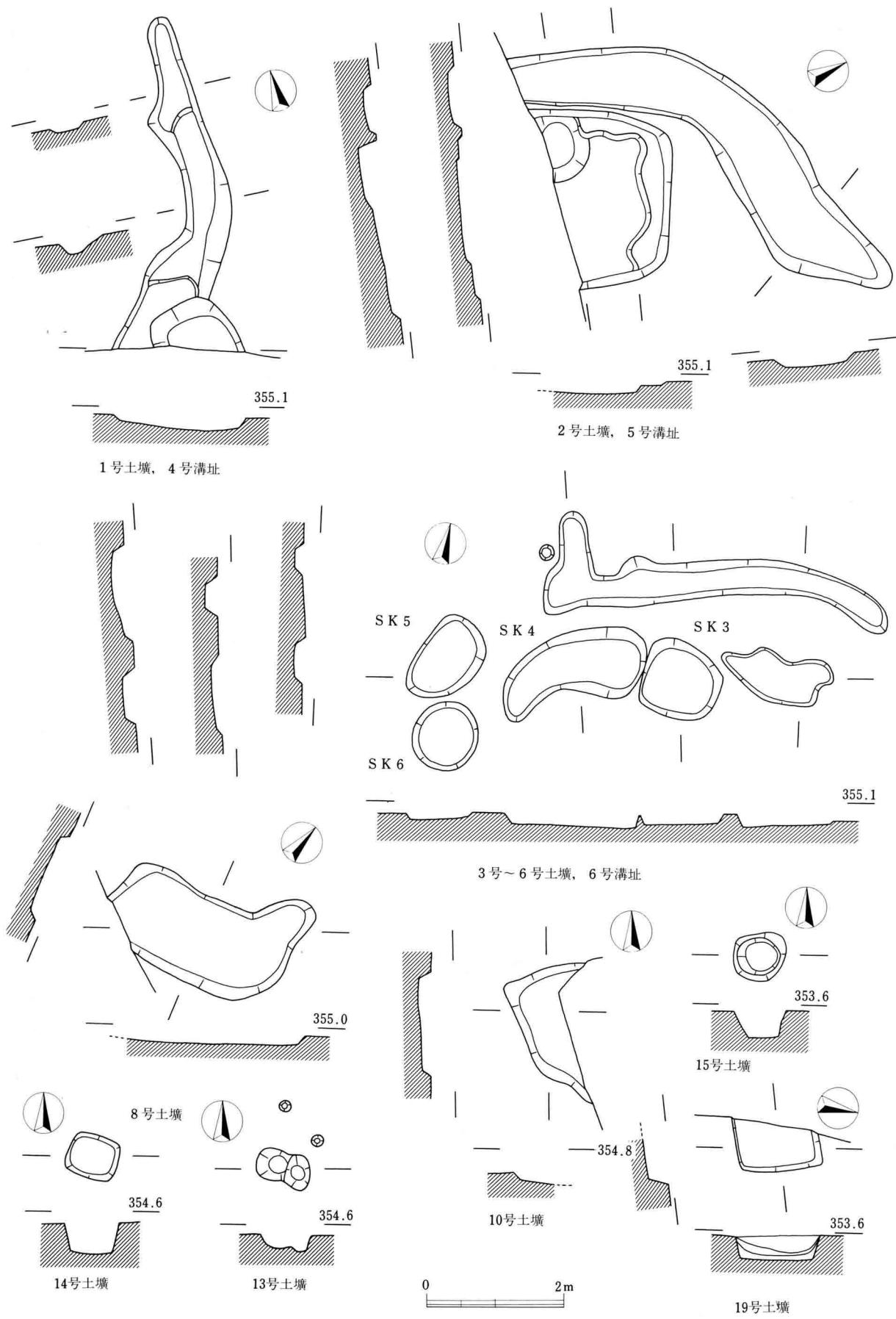
17号土壙 D地区南端の単独検出遺構である。形態は隅丸長方形を呈し、長軸3.36m・南北2.22m・深さ19cmの規模になる。この遺構の特色は人頭大から拳大の集石があることで、西壁直下に長軸50cm程の長円形を呈する自然円礫が据えるように置かれている他は、投げ込まれたような状態であった。覆土からは炭化物の混入が認められたものの焼土等は確認できなかった。

19号土壙 11号住居址内に位置し、この遺構よりも新しい。覆土は3層あり、2層は多量の炭化物を含むが、焼土等は確認されない。

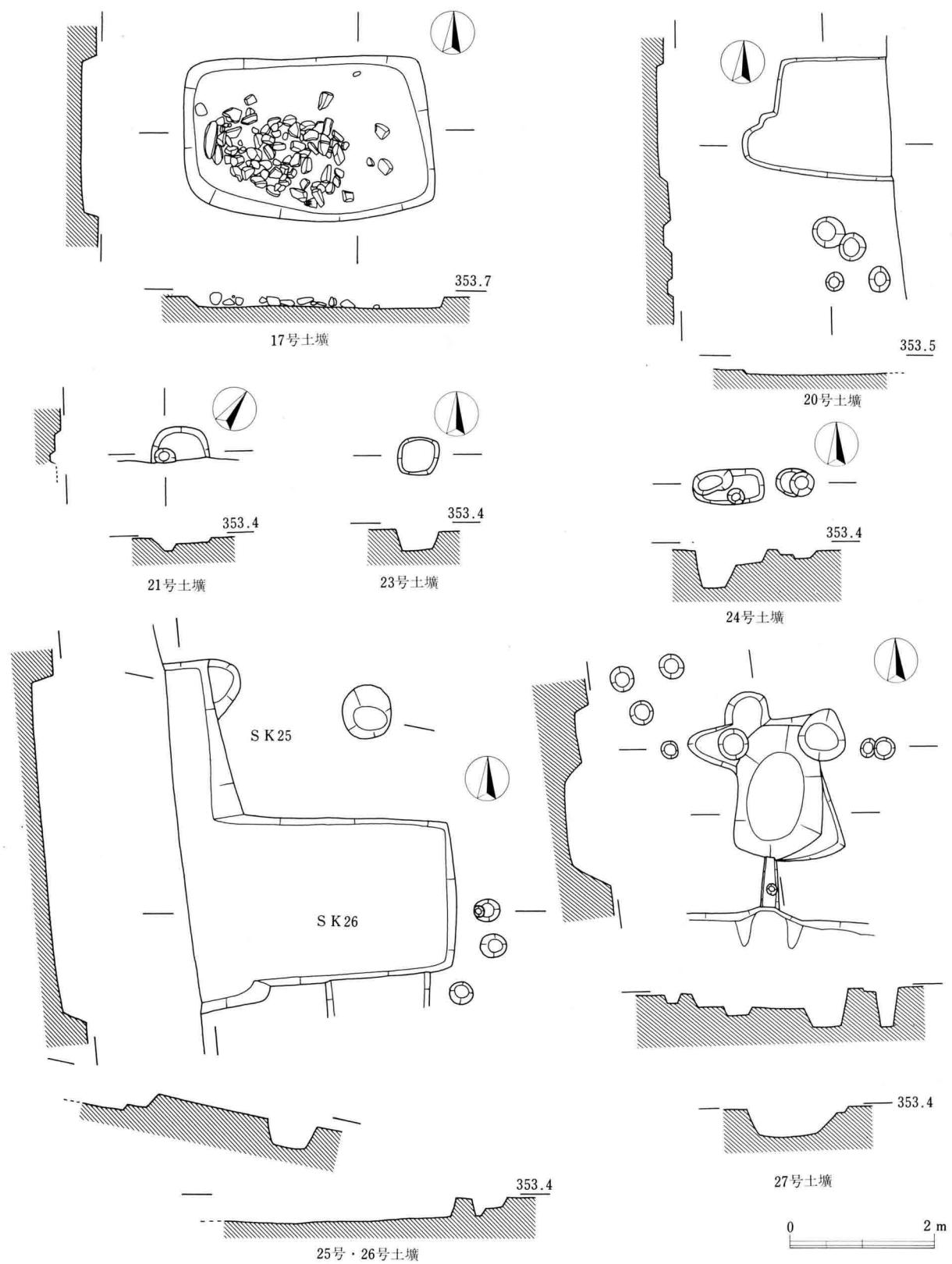


37図 土壙出土遺物実測図 (1 : 4)





39図 土壌・溝址実測図 (1 : 80)



40図 土壌実測図 (1 : 80)

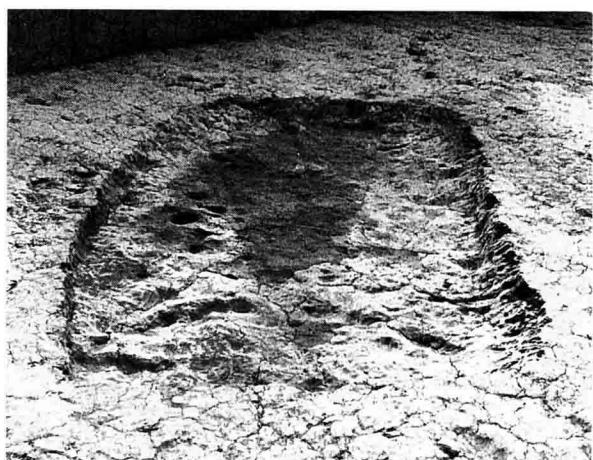
土壤一覧表

番号	遺構図	形態	規模 (m)	方向	重複 遺構 等	底面	遺物図	遺物等
			南北×東西×深さ	N-E				
1	39	(隅丸方形)	—×0.94×0.32	107	S D 4	舟底状		〔土〕 坯・甕〔須〕 坯・甕
2	"	(")	—×2.6×0.19	25		有段	38	〔土〕 坯・甕〔須〕 坯(1)・蓋・甕
3	"	不整円形	1.12×1.15×0.15	0		舟底状		〔土〕 坯・甕〔須〕 甕
4	"	不整形	1.0×2.13×0.2	78		"		
5	"	不整楕円形	1.33×0.9×0.1	25		"		
6	"	円形	1.0×—×0.15			"		
7	13	不整円形	1.48×1.45×0.33		S B 3	平坦		〔土〕 坯・甕〔須〕 坯
8	39	不整隅丸長方形	1.3×2.68×0.15	74		舟底状		〔土〕 坯
9	17	不整円形	1.33×1.54×0.11		S B 5	平坦		〔炭化物・焼土〕
10	39	(不整形)	2.1×—×0.21	115				〔土〕 坯・甕〔須〕 坯
11	—	—	—	—	—	—		—
12	—	—	—	—	—	—		—
13	39	不整形	0.8×0.49×0.25	90		凹凸		〔土〕 坯・甕〔須〕 壺
14	"	隅丸方形	0.66×0.8×0.48	102		舟底状		〔土〕 甕
15		不整円形	0.77×0.7×0.44			"		〔土〕 坯・甕〔須〕 坯
16	22	円形	0.58×—×0.31			平坦		〔土〕 甕〔須〕 蓋・壺
17	40	隅丸長方形	2.22×3.36×0.19	90		"	38	〔須〕 坯(16)・蓋〔灰〕 梱〔珠洲〕 片口擂鉢・甕〔青磁〕 碗〔石〕 砥石〔集石〕
18	22	円形	0.4×—×0.13	36		"		〔土〕 坯〔須〕 坯
19	39	(方形)	1.22×—×0.33	109	S B11	"	38	〔須〕 坯(2)・甕〔石〕 敲打器〔炭化物〕
20	40	不整長方形	1.68×—×0.12	90		"		〔土〕 坯・甕
21	"	(隅丸方形)	—×0.8×0.1			"		
22	28	長方形	—×1.75×0.26	100	S B11	"		〔土〕 坯・甕〔須〕 坯・甕
23	40	不整円形	0.56×—×0.28			"		〔土〕 甕
24	"	不整隅丸長方形	0.5×1.0×0.22	116		"		〔土〕 甕〔須〕 坯〔灰〕 瓶
25	"	(長方形)	—×2.3×0.3		S K26	"	38	〔土〕 盆(4)・坏(5・6)・甕〔須〕 坯(8)・蓋(9)・甕(10)〔鉄〕 麻皮剥器
26	"	(")	4.65×—×0.32	95	S K25	"	38	〔土〕 坯・梶(11)・甕(13)〔須〕 高台付坏(12)・甕〔灰〕 長頸瓶
27	"	不整台形	1.93×1.48×0.4	93	S B10	舟底状		〔土〕 坯・甕〔須〕 坯・蓋・甕〔灰〕 瓶

遺物等 〔土〕 土師器 〔須〕 須恵器 〔灰〕 灰釉陶器 〔鉄〕 鉄製品 〔石〕 石製品 〔珠洲〕 珠洲焼



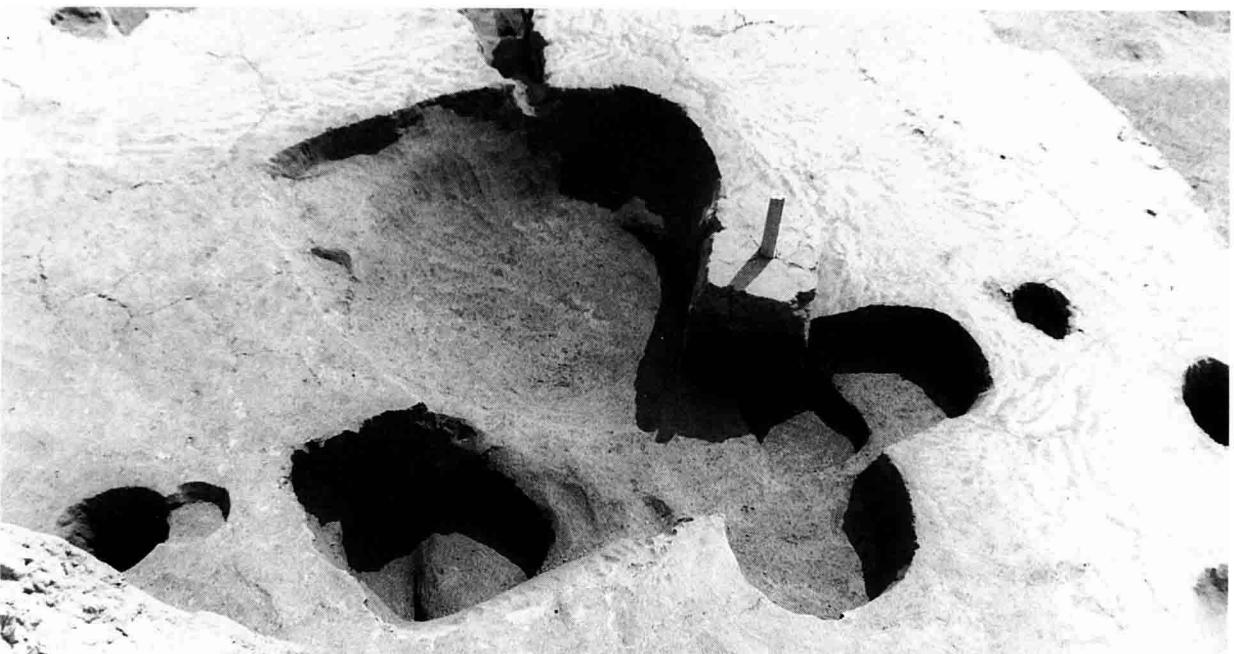
III-17 17号土壤集石（東より）



III-18 17号土壤



III-19 17号土壤集石（北より）



III-20 27号土壤

溝址

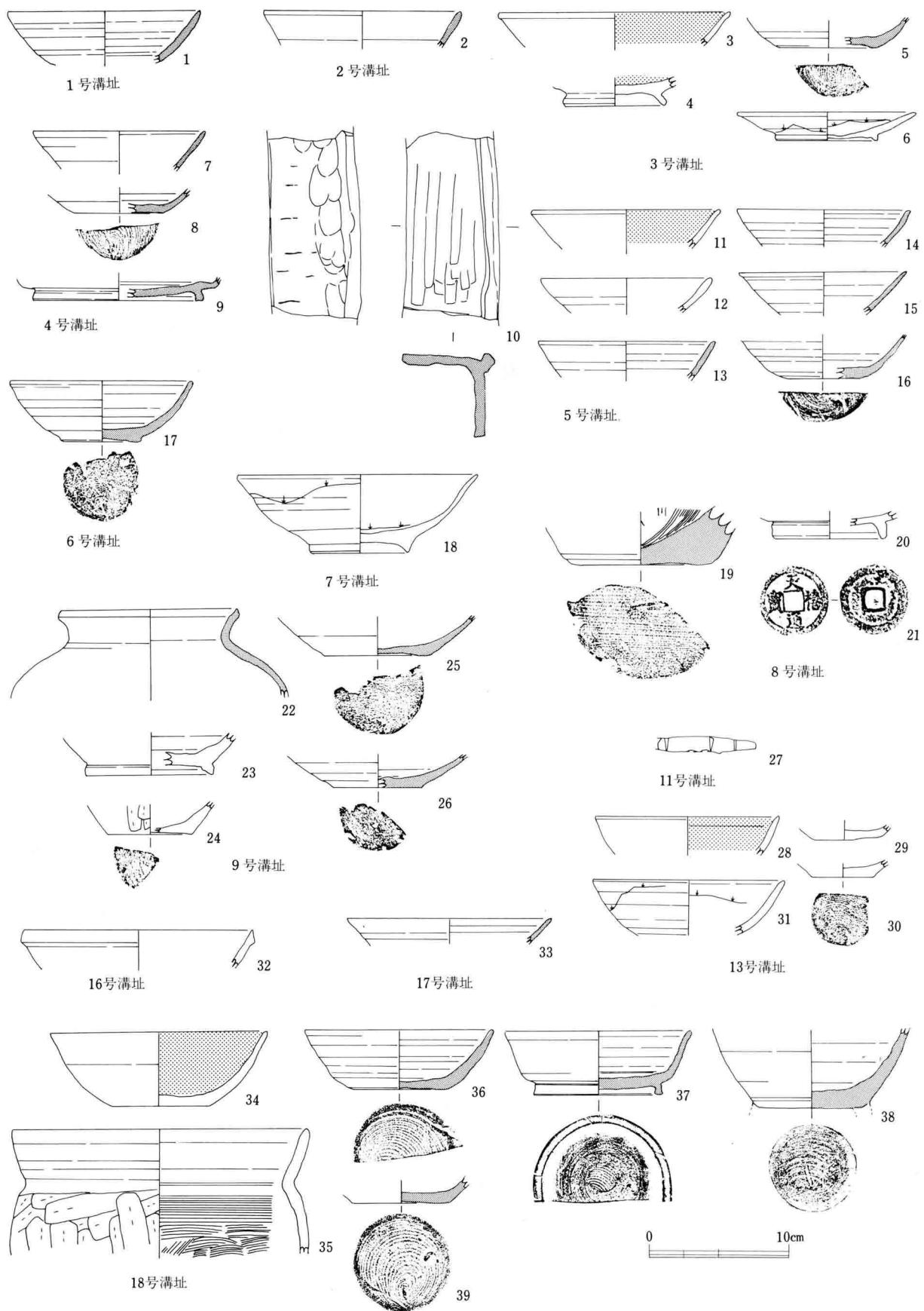
土壠状のものから大規模なものまで遺構番号を付したものは28本である。このうち自然流路と思われるもので、小砂利や砂層が堆積するものは8号と9号がある。この両溝は接続する可能性が高く、他の調査地から確認されないところから、9号溝址の方向（北→南）へ直流するものと思われる。他は人工的に掘り込まれた溝址と考えられる。ただし、3号溝址の底面には砂・小砂利が認められることから流路としての利用が考えられる。用途不明の溝址が多い中で、7号・10号・13号溝址は何かを区画するかのような形態を有し、屈曲・弧状を描く。形態から7号と17号溝址は接続するものと思われる。出土遺物から検出遺構のほとんどが平安時代に比定されるが、24号溝址は奈良時代、7～9号・12号・17号溝址は中世の所産と考えられる。

遺物で注目されるものに5号溝址出土の瓦塔（44図10）と推定される破片がある。軸部にあたるものと思われ、隅部に柱を表現した凸帯が付され、中間に四角窓がうがたれる。須恵質で白灰色を呈し、内面に粘土紐成形痕、指頭ナデ压痕を残し、外面はハケナデ調整で仕上げる。残高12.5cmを測る。24号溝址は唯一奈良時代に比定される遺構で、特異な須恵器高坏（44図12）が出土している。44図13の高坏は盤状の坏部に高脚が付されるのに対し、12は高台付坏に低い脚が付される形態で他に類例をみない。

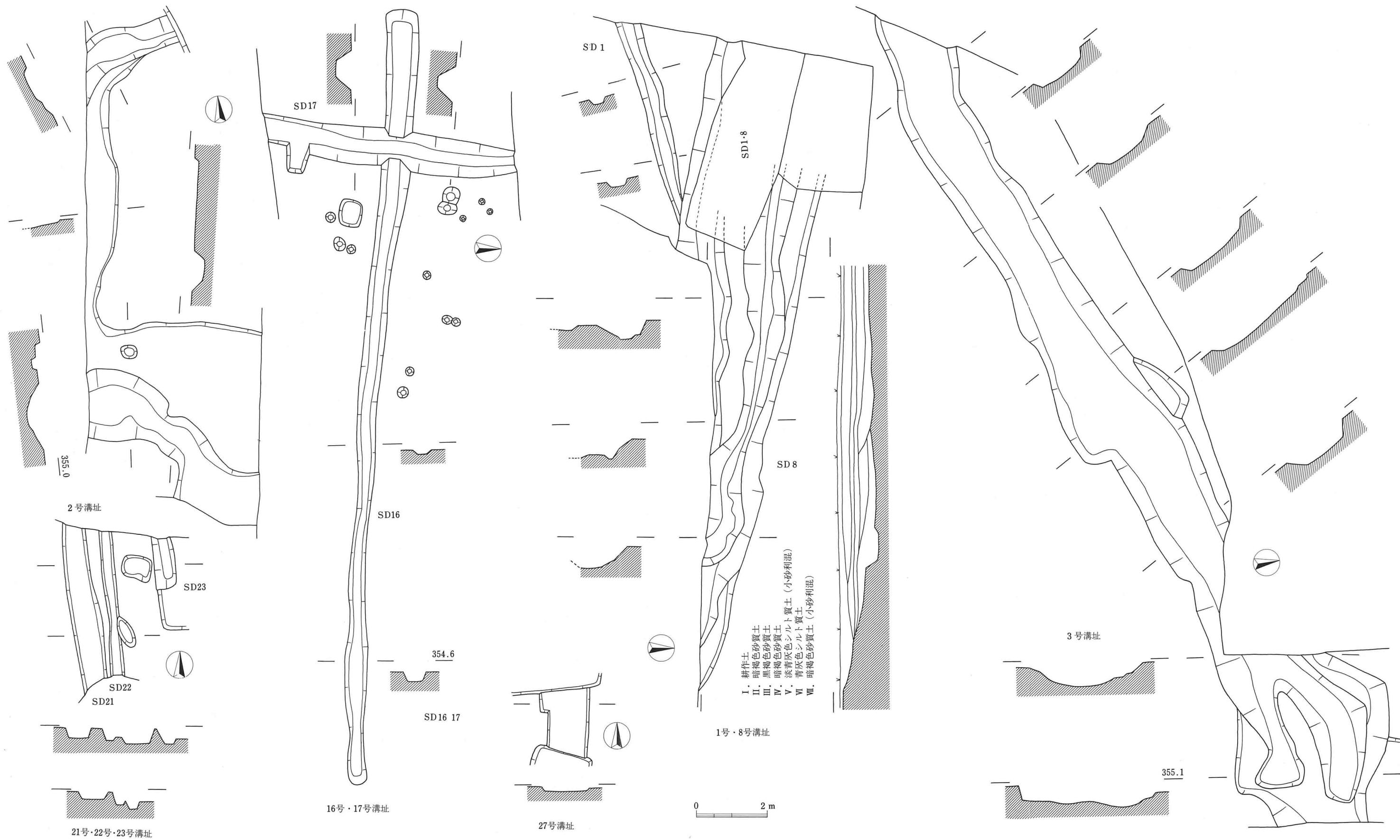
溝址一覧表

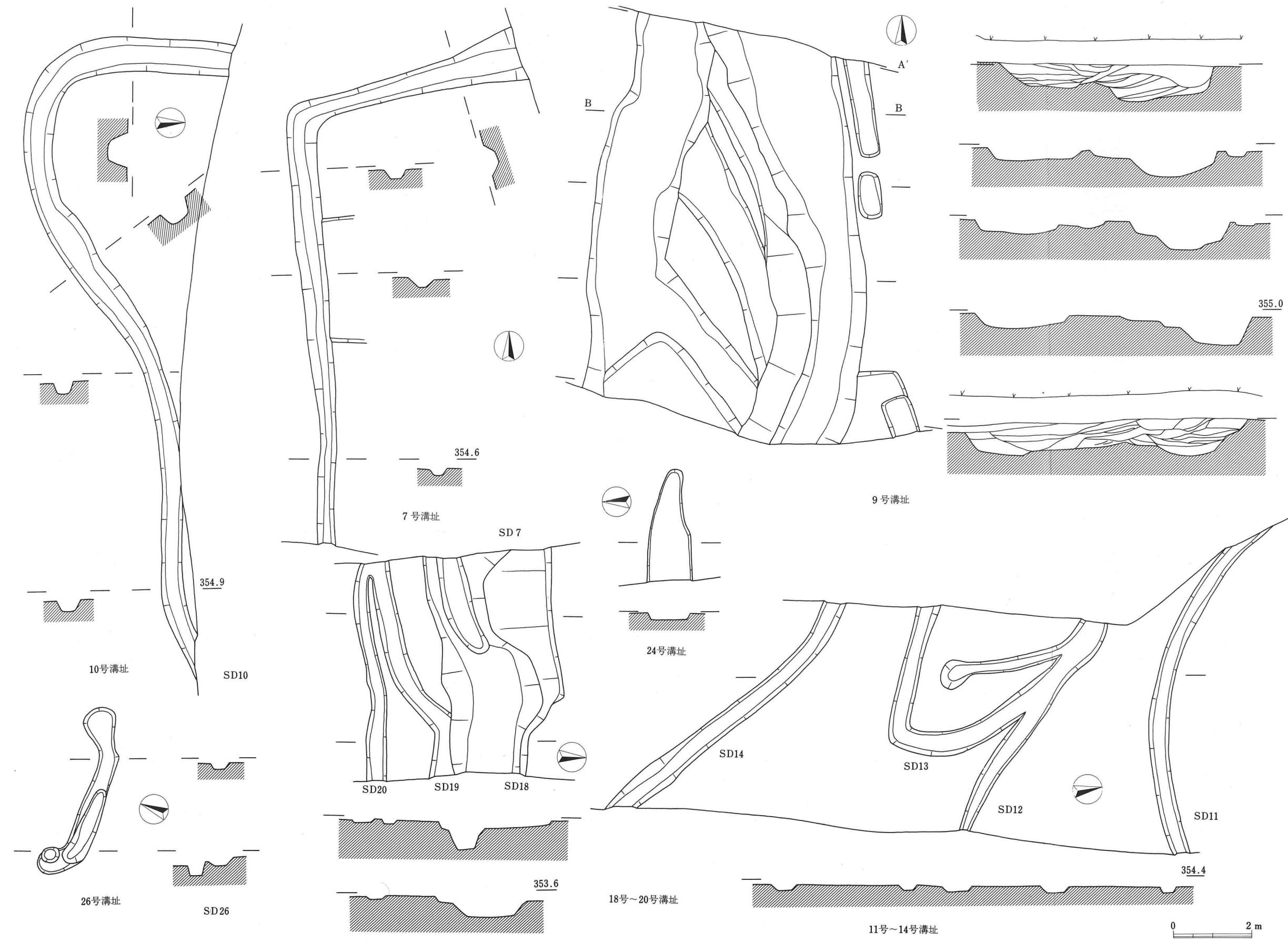
番号	遺構 図	形態	規模		方向	重複 遺構	遺物 図	遺物等
			南北×東西×深さ					
1	41	U字形 直線	(7.5) × 0.3 ~ 0.65 × 0.15		WSW → ENE	S D 8	43	〔土〕 坏・甕〔須〕 坏(1) 〔灰〕 瓶
2	"	不整形・数条 の複合? 屈曲	— × — × 0.1 ~ 0.55		N → S → E	S B 1 S D 3	"	〔土〕 甕・羽釜〔須〕 坏(2)・甕
3	"	幅広U字形 直線	1.8 ~ 2.3 × (26.0) × 0.3 ~ 0.6		WSW → ENE	S B 2	"	〔土〕 坏(3)・椀(4)・甕〔須〕 坏(5)・蓋・ 甕〔灰〕 盆(6)
4	39	不整形 弯曲・終結	(4.7) × 0.4 ~ 1.0 × 0.11 ~ 0.19		N → S 弯曲 → SSW	S K 1	"	〔土〕 坏・甕〔須〕 坏(7・8)・高台付坏(9)・ 甕
5	"	不整形 弯曲・終結	(6.0) × 0.65 ~ 1.2 × 0.15		N E → S N		"	〔土〕 坏(11・12)・蓋・甕〔須〕 坏(13~16)・ 蓋・甕・瓦塔軸部(10)
6	"	不整形・孤状 両端終結	0.45 ~ 0.55 × 5.0 × 0.13 ~ 0.27		E → W		"	〔土〕 甕〔須〕 坏(17)
7	42	U字形・直線 屈曲	0.4 ~ 1.3 × 0.28 ~ 0.44		ENW → WSW直角 S		"	〔灰〕 椭(18)
8	41	不整形・直線 SD 9接続?	3.72 × (18.0) × 0.6 ~ 0.7		WNW → ESE	S D 1	"	〔土〕 坏・甕・羽釜・内耳〔須〕 坏・甕〔灰〕 椭(20)〔珠洲〕 楼鉢(19)〔天祐通寶〕
9	42	不整形・数条 の複合	(10.0) × 5.1 ~ 7.0 × 0.3 ~ 0.85		N → S NW → S E		"	〔土〕 坏・甕(24)・〔須〕 坏(25・26)・甕(22)・ 壺(23)〔灰〕 瓶〔青磁〕
10	"	U文形 弯曲	0.5(5.0) × 0.9(16.0) × 0.3 ~ 0.5		N → S 弯曲 → W → S			〔土〕 坏・甕
11	"	U字形 孤状	0.45 × (8.0) × 0.2		NNW弯曲 → E		"	〔土〕 坏・甕〔須〕 坏〔鉄〕 刀子(27)
12	"	U字形 直線的	(23.0) × 0.3 ~ 0.5 × 0.10 ~ 0.15		NNW → S E	S D 13		〔土〕 坏・甕・内耳〔須〕 坏・甕
13	"	U字形 直線的・屈曲	(22.0) × 0.4 ~ 0.6 × 0.2 ~ 0.3		NNW → SSE → NW	S D 12	"	〔土〕 坏(28~30)〔灰〕 椭(31)〔綠釉陶器〕
14	"	U字形 直線的	(8.0) × 0.48 ~ 0.7 × 0.2 ~ 0.25		WNW → S			〔土〕 坏・甕〔須〕 坏
15	31	U字形 直線的・終結	0.2 ~ 0.44 × (4.8) × 0.1 ~ 0.15		W → ENE	建物址		〔土〕 坏・甕〔須〕 坏・甕
16	41	U字形 SD 7接続?	(6.8) × 0.6 ~ 1.1 × 0.5 ~ 0.56		N → S	S D 16	"	〔土〕 坏・甕〔須〕 坏・四耳壺〔灰〕 瓶〔白磁〕 浅鉢(32)
17	"	U字形 直線	0.4 ~ 0.9 × 21.7 × 0.2 ~ 0.34		W → E	S D 17	"	〔土〕 坏・甕・羽釜〔須〕 坏(33)・甕〔灰〕 瓶 〔鉄滓〕
18	40	不整形 直線的	2.42 ~ 3.2 × (5.6) × 0.6 ~ 0.75		W → E	S D 19		〔土〕 坏・甕〔須〕・甕・四耳壺
19	"	U字形 孤状	0.68 × (4.8) × 0.15		W → NE	S D 18		〔土〕 坏
20	"	U字形 直線的	0.42 ~ 0.54 × (5.6) × 0.1 ~ 0.14		W → E	S D 19	44	〔土〕 坏(1)・甕
21	41	U字形 直線的	(4.6) × 0.65 ~ 0.92 × 0.24 ~ 0.3		N → S		"	〔土〕 坏(2・3)・甕〔須〕 坏(5・6)・蓋(4)・ 甕〔灰〕 椭
22	"	U字形 直線的	(4.0) × 0.25 ~ 0.4 × 0.32		N → S		"	〔土〕 坏・甕〔須〕 坏(7)・蓋・甕
23	"	U字形 直線的・終結	(1.45) × 0.64 × 0.4		N → S	S B 8	"	〔土〕 坏・甕〔須〕 坏(8・9)
24	42	不整形 直線的・終結	0.5 ~ 1.2 (2.8) × 0.25		E → W		"	〔土〕 甕〔須〕 坏(11)・蓋(10)・高坏(12・13)
25	29	U字形 両端終結	3.25 × 0.57 × 0.12		N → S		"	〔土〕 甕(14)〔須〕 坏(18・19)・蓋(15~17)壺
26	42	不整形 両端終結	0.48 ~ 0.62 × 4.5 × 0.23		W → E		"	〔土〕 坏・甕(20)〔須〕 坏・蓋・甕
27	41	幅広U字形 直線的	(1.8) × 1.15 × 0.18		N → S	S K 22・25		〔土〕 坏・甕〔須〕 坏(21)・高台付坏(22)・甕

遺物等 〔土〕 土師器 〔須〕 須恵器 〔灰〕 灰釉陶器 〔鉄〕 鉄製品 〔石〕 石製品 〔珠洲〕 珠洲焼

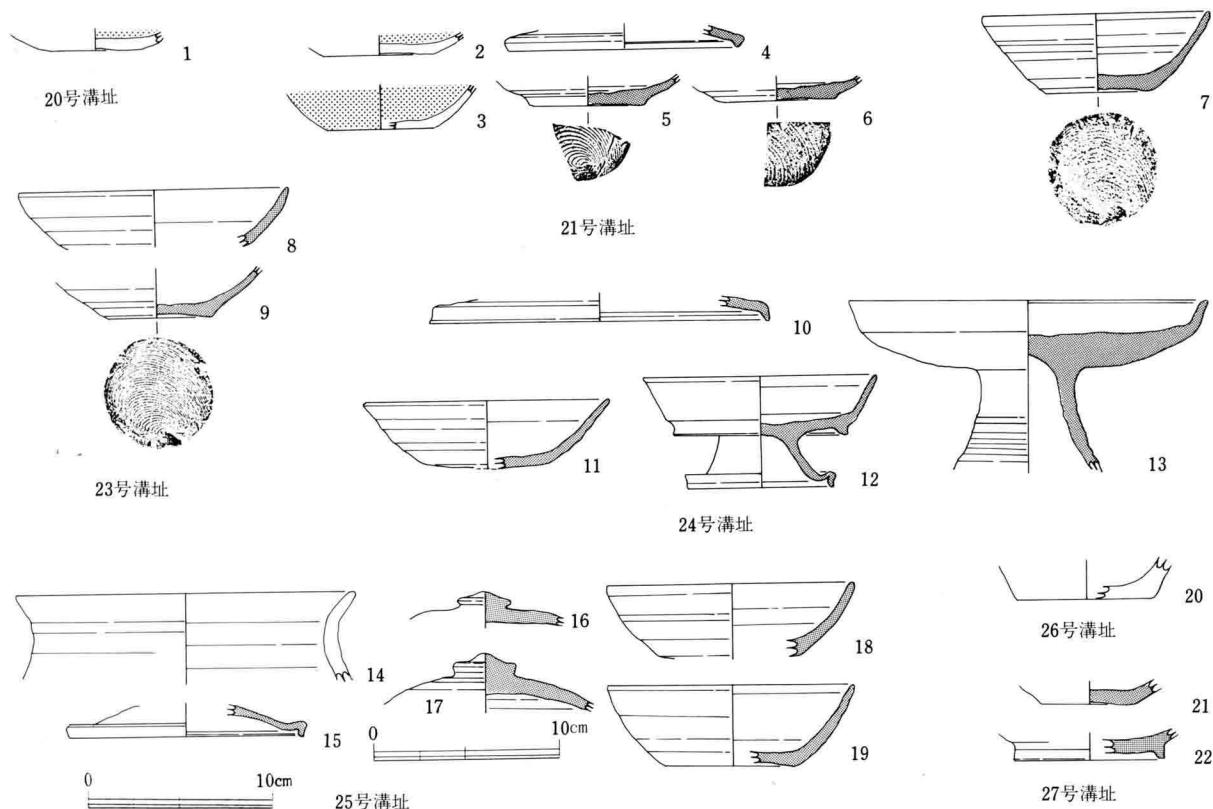


41図 溝址出土遺物実測図 (1 : 4)





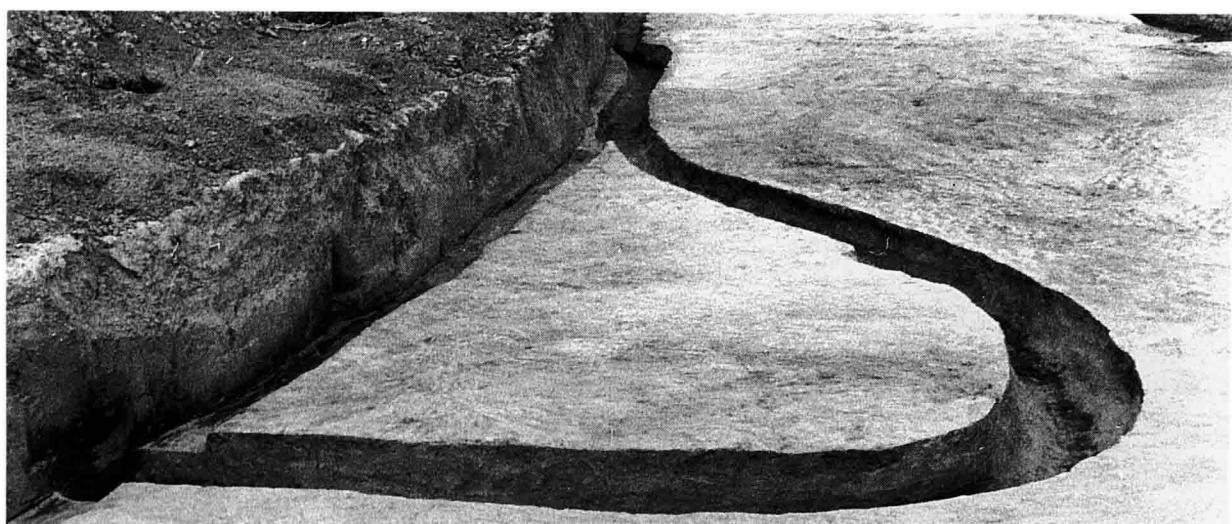
43図 溝址実測図 (1 : 100)



44図 溝址出土土器実測図 (1 : 4)



III-21 7号溝址



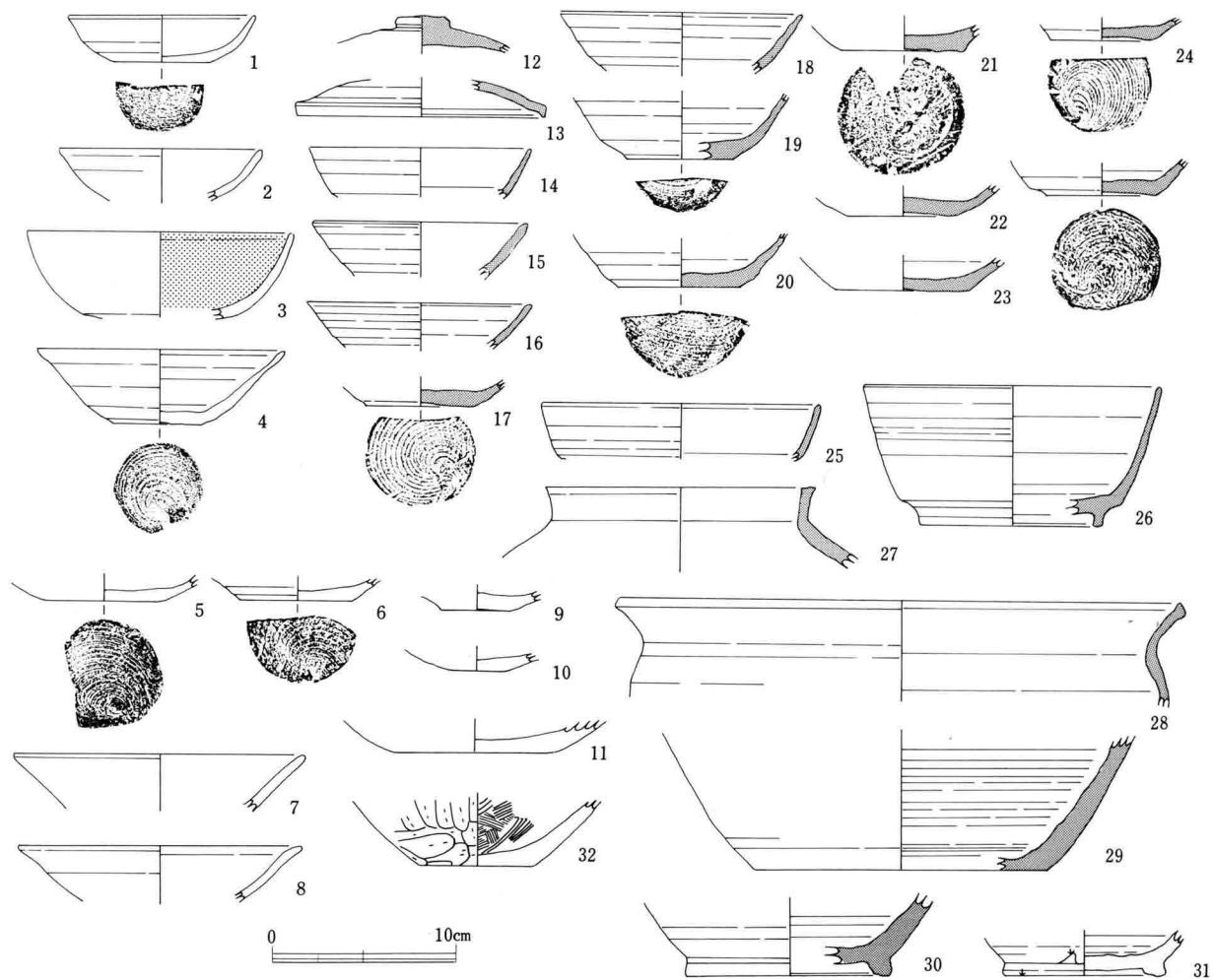
III-22 10号溝址



III-23 3号溝址



III-24 8号溝址



45図 検出土面出土土器実測図 (1 : 4)

遺物観察表

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	
			口径	底径	器高			
1号住居址(10図)								
1	土師器	坏	12.9	6.0	4.7	完	ロクロ、内黒、糸切り	
2号住居後(12図)								
1	土師器	坏	9.0	4.8	2.0	1/3	ロクロ	
2	"	"	17.0			1/7	"	
3	"	甕	25.6			1/8	" ヘラケズリ	
4	"	羽釜	33.2			1/6	ヘラナデ、成形痕	
5	"	"					"	
6	須恵器	坏				1/4	ロクロ、糸切り	
3号住居址(14図)								
1	土師器	甕	11.6			1/4	ロクロ	
2	須恵器	坏	13.0			1/8	"	
3	"	高台付坏		12.2		1/5	"	
4	"	甕		12.2		"	タタキメ、ヘラナデ	
4号住居址(15図)								
1	土師器	坏	10.4			1/5	ロクロ、内黒	
2	"	"	5.8			1/3	"	
3	須恵器	"	5.6			2/3	"	
4	土師質	瓦塔基檀			2.5		ナデ	
5号住居址(17図)								
1	土師器	坏	14.8			1/8	ロクロ、内黒	
2	"	"	19.0			"	"	
6号住居址(19図)								
1	土師器	坏		4.8		3/4	ロクロ、糸切り	
2	鉄製品	刀子						
3	鉄製品	釘						
7号住居址(21図)								
1	須恵器	蓋	14.0			1/8	ロクロ	
2	"	坏	12.0			1/4	"	
3	"	"	6.0			1/2	"、糸切り	
8号住居址(23図)								
1	土師器	坏	16.4	5.8	6.5	1/3	ロクロ、ケラケズリ、内黒	
2	"	"	14.4	6.0	4.0	"	"、糸切り	

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	
			口径	底径	器高			
3	須恵器	壺	13.0	6.0	4.2	2/3	ロクロ、糸切り	
4	"	"	12.4			1/4	"	
5	"	"	14.6			1/7	"	
6	"	"		5.8			"、糸切り	
7	"	"		5.8			"、"	
8	土師器	甕		6.9		3/4	ヘラケズリ	

10号住居址 (27図)

1	土師器	壺	14.8			1/8	ロクロ、内黒	
2	"	"	18.2			1/9	"、"	
3	"	"		6.0		1/2	"、"、ヘラケズリ	
4	"	"		6.8		1/3	"、"	
5	"	椀		8.0			"、"	
6	"	甕	14.6			1/8	ヘラナデ	
7	"	"	20.8			1/4	ヘラナデ	
8	"	"	27.0			1/8	ロクロ、ヘラケズリ、カキメ	
9	"	"	23.0			1/4	ヘラケズリ	
10	"	深鉢	26.0			"	"、ハケナデ	
11	須恵器	壺	14.6			1/8	ロクロ	
12	"	高台付壺		9.6		1/3	"、回転ヘラケズリ	
13	"	"		8.4		2/3	"、糸切り、回転ヘラケズリ	
14	"	"		10.0		1/3	"、"、"	
15	"	"		8.0		2/3	"、"、"	
16	"	"		10.2			"、"、"	
17	"	蓋	14.0			1/3	ロクロ、回転ヘラケズリ	
18	"	壺	12.4	5.2	4.2	完	"、糸切り、窯印	
19	"	"	14.0			1/4	"	
20	"	"	12.2			1/7	"	
21	"	"	13.0			"		
22	"	"		5.6		1/2	"、糸切り	
23	"	"		5.8		2/3	"、"	
24	"	"		5.7		1/2	"、"	
25	"	甕	9.5			1/8	ロクロ	
26	"	壺		6.8			"、自然釉	
27	"	"				1/2	"	
28	"	短頸壺	14.0			1/7	"、自然釉	
29	"	甕		15.3		1/8	タタキメ、ヘラケズリ	

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等
			口径	底径	器高		
11号住居址 (28図)							
1	土師器	甕	20.8			1/4	ヘラナデ
2	"	"	24.4			"	ロクロ、ヘラナデ
3	"	"	23.2			"	ヘラナデ
4	"	"		9.0		1/2	"
5	"	蓋	16.0		3.1	1/3	ロクロ、回転ヘラケズリ
6	"	坏	12.2			1/8	"
7	"	"		7.0		1/2	"、糸切り、火だすき
8	"	"		5.8			"、"、"
9	"	"		5.8			"、"、"
10	"	壺		10.0		1/3	"、自然釉
11	石製品	敲打器			15.6		
12	鉄製品	刀子					
12号住居址 (31図)							
1	土師器	坏		5.6			ロクロ、糸切り
2	"	"		5.1			"、内外黒
3	"	甕	14.6			1/8	ヘラナデ
4	"	"	26.5			1/5	"
5	須恵器	蓋	9.6		2.3	2/3	ロクロ、回転ヘラケズリ
6	"	"	12.6			1/5	"、"
7	"	坏	13.3	5.7	3.5	1/8	"
8	"	"	13.8	5.2	3.8	完	"、糸切り
9	"	"		6.4			"、"、墨書
10	"	"	14.0	6.0	4.0	2/3	"、"
11	"	"	13.6			1/8	"
12	"	"	13.2			1/4	"
13	"	"	12.8	6.2	3.7	1/6	"、回転ヘラケズリ
14	"	"	13.3	5.6	3.8	2/3	"、糸切り
15	"	"	14.9	6.9	3.7	1/3	"、"
16	"	"	15.2	8.0	3.7	1/7	"、"
17	"	"	13.8	7.1	4.1	1/7	"、"
18	"	"	12.4			1/8	"
19	"	"	11.2			1/6	"
20	"	高台付坏		9.0		1/2	"
21	"	坏	16.0			1/8	"
22	"	長頸壺					"

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	
			口径	底径	器高			
23	須恵器	長頸壺				2/3	ロクロ	
24	"	甕	32.3			1/4	"	
焼土を伴う溝状遺構(34図)								
1	土師器	坏	10.0	4.0	2.4	1/7	ロクロ、糸切り	
竪穴状遺構(34図)								
2	須恵器	甕		14.0		1/4	タタキメ、ナデ	
3	須恵質	硯				1/2	裏面線刻画、穿穴	
2号土壤(37図)								
1	須恵器	坏	15.2			1/7	ロクロ	
19号土壤(37図)								
2	須恵器	坏	11.4			1/7	ロクロ	
3	石製品	磨石						
25号土壤(37図)								
4	土師器	皿	12.0	6.4	2.7	1/2	ロクロ、内黒	
5	"	坏	13.2			1/7	"、"	
6	"	甕		6.2		1/4	"、糸切り	
7	須恵器	蓋	12.0				"	
8	"	坏	13.6	6.4	4.1	3/4	"、糸切り	
9	鉄製品	麻皮剥器			8.7			
10	須恵器	壺	36.0			1/10	ロクロ	
26号土壤(37図)								
11	土師器	椀	13.4			1/3	ロクロ	
12	須恵器	高台付坏	12.2	9.3	3.9	3/4	"、回転ヘラケズリ	
13	土師器	甕	19.0			1/7	"	
14	灰釉陶器	長頸壺	7.3				"、自然釉	
17号土壤(37図)								
15	珠洲焼	片口擂鉢	28.2	11.4	11.6	1/4	ヘラナデ、ケズリ	
16	須恵器	坏		6.4		1/2	ロクロ、糸切り	
17	石製品	砥石						
1号溝址(41図)								
1	須恵器	坏	13.6	7.2	3.8	1/8	ロクロ	
2号溝址(41図)								
2	須恵器	坏	14.0			1/8	ロクロ	
3号溝址(41図)								
3	土師器	坏	16.4			1/8	ロクロ	
4	"	椀		7.0		1/3	"、糸切り、内黒	

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等
			口径	底径	器高		
5	須恵器	坏		7.0		1/3	ロクロ、糸切り
6	灰釉陶器	皿	12.8	7.0	2.0	1/4	"、漬け掛け
4号溝址(41図)							
7	須恵器	坏	12.1			1/8	ロクロ
8	"	"		6.0		1/3	"、糸切り
9	"	高台付坏		12.0		"	"、回転ヘラケズリ
5号溝址(41図)							
10	須恵質	瓦塔軸部	幅6.5				ヘラナデ、ナデ
11	土師器	坏	13.4			1/9	ロクロ、内墨
12	"	"	12.0			1/8	"
13	須恵器	"	12.4			1/7	"
14	"	"	12.0			1/8	"
15	"	"	12.6			"	"
16	"	"		6.0		1/3	"、糸切り
6号溝址(41図)							
17	須恵器	坏	12.8	5.6	4.3	2/3	ロクロ、糸切り
7号溝址(41図)							
18	灰釉陶器	椀	16.8	6.8	5.5	4/5	ロクロ、漬け掛け
8号溝址(41図)							
19	須恵器	擂鉢		10.0		1/3	ヘラナデ
20	灰釉陶器	椀		8.0		"	ロクロ
9号溝址(41図)							
22	須恵器	甕	12.2			1/4	ロクロ、自然釉
23	灰釉陶器	瓶		8.8		"	"
24	土師器	甕		6.0		"	"、糸切り
25	須恵器	坏		7.4		1/2	"、"
26	"	"		6.0		"	"
11号溝址(41図)							
27	鉄製品	刀子					
13号溝址(41図)							
28	土師器	坏	13.0			1/8	ロクロ、内黒
29	"	"		5.0			"
30	"	"		4.4		4/5	"、糸切り
31	灰釉陶器	椀	13.6			1/8	"、漬け掛け
16号溝址(41図)							
32	白磁	碗	16.2			1/8	

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等	
			口径	底径	器高			
17号溝址 (41図)								
33	須恵器	壺	14.4			1/8	ロクロ	
18号溝址 (41図)								
34	土師器	壺	15.2	6.5	5.2	1/2	ロクロ、糸切り、回転ヘラケズリ	
35	"	甕	21.0			1/4	ヘラケズリ、ハケナデ	
36	須恵器	壺	13.3	6.8	4.2	1/2	ロクロ、糸切り	
37	"	高台付壺	13.0	9.2	4.6	"	"、"、回転ヘラケズリ	
38	"	壺					"、"	
39	"	壺		6.8			"、"	
20号溝址 (44図)								
1	土師器	壺		5.2			ロクロ、糸切り、内黒	
21号溝址 (44図)								
2	土師器	壺		5.8			ロクロ、糸切り、内黒	
3	"	"		5.6		1/2	"、"、内外黒	
4	須恵器	蓋	12.2			1/8	"	
5	"	壺		6.2		1/4	"、糸切り	
6	"	"		6.4		"	"、"	
22号溝址 (44図)								
7	須恵器	壺	12.0	5.8	4.23	完	ロクロ、糸切り	
23号溝址 (44図)								
8	須恵器	壺	14.4			1/7	ロクロ	
9	"	"		5.8			"、糸切り	
24号溝址 (44図)								
10	須恵器	蓋	18.0			1/10	ロクロ	
11	"	壺	13.0	6.8	3.6	1/3	"、範切離	
12	"	高壺	12.4	7.8	6.0	完	"、回転ヘラケズリ	
13	"	"	19.0			2/3	"	
25号溝址 (44図)								
14	土師器	甕	18.2			1/8	ヘラナデ	
15	須恵器	蓋	12.6			1/4	ロクロ、回転ヘラケズリ	
16	"	"					"、"	
17	"	"				3/4	"、"	
18	"	壺	13.4			1/4	"	
19	"	"	13.2	7.0	4.3	1/3	"、糸切り	
26号溝址 (44図)								
20	土師器	甕		7.0		1/4	ヘラナデ	

番号	種別	器種	法量 cm			遺存	調整等
			口径	底径	器高		
27号溝址 (44図)							
21	須恵器	壺		5.8			ロクロ、糸切り
22	"	高台付壺		8.0		1/4	"、回転ヘラケズリ
検出面 (45図)							
1	土師器	壺	10.1	5.0	2.6	1/2	ロクロ、糸切り
2	"	"	11.0			2/3	"
3	"	"	14.2	8.0	4.7	1/7	"、内黒
4	"	"	13.4	4.9	4.0	3/4	"
5	"	"		5.6		1/4	"、糸切り
6	"	"		6.0		1/2	"、"
7	"	"	15.6			1/8	"
8	"	"	15.2			1/2	"
9	"	"		4.0			"、糸切り
10	"	"		4.0			"
11	土師器	甕		8.0		1/3	ヘラケズリ
12	須恵器	蓋					ロクロ、回転ヘラケズリ
13	"	"	13.4			1/8	"
14	"	壺	12.0			1/3	"
15	"	"	11.6			1/5	"
16	"	"	12.0			1/7	"
17	"	"		6.0		3/4	"、糸切り
18	"	"	13.0			1/7	"
19	"	"		5.8		1/5	"、糸切り
20	"	"		6.6		1/2	"、"
21	"	"		6.6			"、"
22	"	"		6.0			"、"
23	"	"		7.0			"、"、回転ヘラケズリ
24	"	"		5.3		2/3	"、"
25	"	"		15.0		1/8	"
26	"	高台付壺	16.2	10.0	7.6	1/5	"
27	"	短頸壺	14.8			1/7	"、自然釉
28	"	深鉢	31.0			1/8	"
29	"	"		16.0		1/10	"
30	"	壺		11.0		1/4	"
31	灰釉陶器	椀		9.0		1/2	"
32	土師器	甕		6.2		1/4	ヘラケズリ、ハケナデ

IV 結 語

調査は、遺跡推定範囲のうち道路敷部と限定されたものであったが、遺跡の東側範囲の確定と集落遺構の存在を立証した点評価されよう。

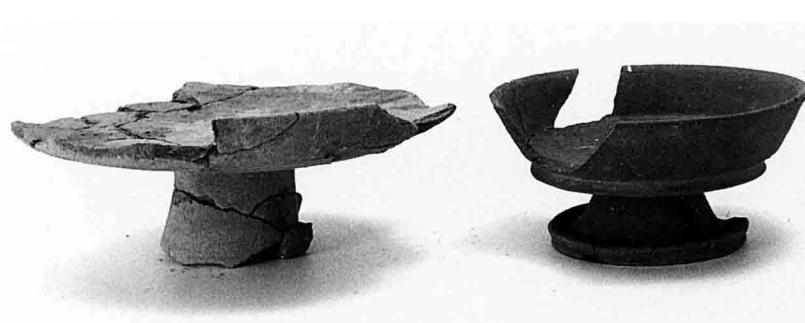
遺跡範囲は帯状に延びる微高地上に展開し、居住遺構は高地に、周縁部は溝状遺構が多くなるものと思われる。確実に住居形態をとるものはD地区に集中し、10号・11号住居址の重複関係にある点から見れば、数次にわたり集落が形成されたものと思われる。ただ規模的な広がりは今回の調査で把握できなかつたが、川中島扇状地の南宮遺跡のような小規模、集中型の集落址が予想される。

奈良時代の遺構は24号溝址が唯一のものである。溝址と称したが土壌状のものと考えられ、覆土に炭化物を多く含み、高坏の出土等から祭祀的な色彩の強い遺構である。本遺跡における集落の形成は該期をもって開始されたものと思えるが、古墳時代後期の遺物が数点ではあるが採集されており、小規模集落が先行して形成された可能性がある。またA地区東端試掘坑の下部溝址出土の土器片は、今回の検出面より深い地層からのもので、古墳時代遺構は更に深い位置に存在している可能性を示唆しているものと思える。ただし、今回採集した古墳時代土器はローリングを受けておらず、南東約1kmに所在する田中沖遺跡I・IIの発掘調査の所見から古墳時代から平安時代の遺構が同一レベルから検出されている点に注目すれば、土層の差による遺構展開はそれ程ないものとも思え、扇状地堆積の状況が複雑な様相を物語っているといえよう。次の平安時代に至ると各種の遺構が確認され、D地区のような居住地域を形成するようになり、川中島扇状地への進出が本格化するようで、II章2節歴史的環境で記載されているとおり延喜式や倭名抄の神社・郷の存在を裏付ける。ちなみに本遺跡名を田牧居帰としたのは、字居帰をイキと呼称し、池郷の比定地頤氣との混乱を避けるため田牧を冠した。実の呼称はイガエリとの事であるが、意外に当初の呼称を読み替えた可能性もあり、池郷の範囲に含まれていたかもしれないと考えている。扇状地扇央への進出は生産性を求めてのものである点を考慮すれば、奈良・平安時代には犀川の氾濫はおさまり、定期を迎えていたことが予想され、航空写真からうかがえる旧河川路としての窪地は絶好の水田可耕地として利用をうながすものであったであろうし、堰の開削を容易になし得たものと考える。しかし今回の調査では稻株痕様小ピットを多数残す水田址様遺構を検出したが、それは凹地利用したもので畦畔等の区画はなく、株痕様小ピットにも規格性がなく直播の様相を呈していた。微高地上の生産址のあり方として注目されよう。居住関係遺構は平安時代前半の9~10世紀に比定されるものが主体をなしており、平安時代後半のものがB地区西側において若干認められるにすぎなく、南宮遺跡、田中沖遺跡IIに見られるような富部御厨を背影とした遺構・遺物群は確認されない。ただし遺物には注目されるものがあり、瓦塔片・陶硯の出土は本遺跡の性格内容の高いことを意味する。時代を比定することは伴出遺物が少ない点から困難であるが、出土地点周辺が平安時代後半のものが多いことを考慮して一応この時期にあてる。瓦塔の存在は、近隣に仏教関係の遺構があることを予想させ、特別な領域であったことをうかがわせる。素焼のものと須恵質の2基の存在が予想される。陶硯は通常認められる円面硯、風字硯の形態をとらず五角又は六角形と推定される特異なもので、裏面に意図不明な線刻が描かれる。この遺物の存在も一般的かつ庶民的遺跡の性格を超えたものの存在、例えば仏教関係、役所的な遺構等の存在を裏付ける資料である。中世の遺構は、17号土壙、7号~9号・12号・17号溝址にすぎなく、8号・9号は自然流路と考えられ、7号・17号は直角に屈折する形状になるものと思われるが用途不明である。

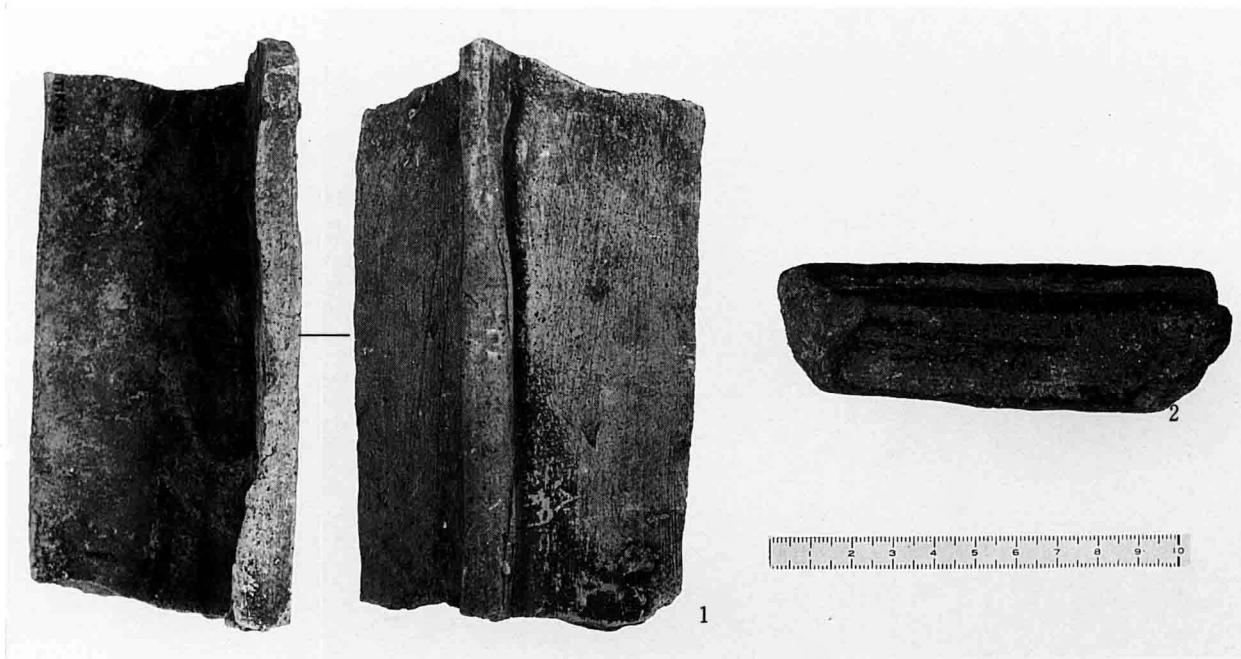
以上、今回の発掘調査の所見を垣間見たところであるが、集落の規模・性格の問題、富部御厨との関係、仏教的性格遺構の追求等数々の問題を提起している。今後の調査に期待する。



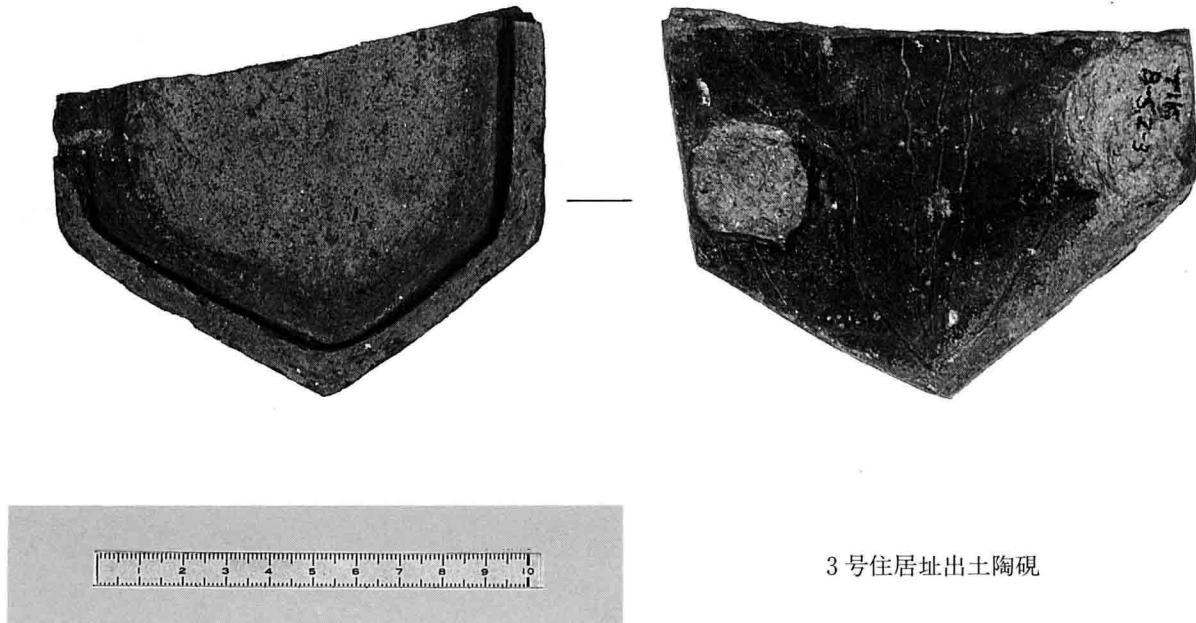
18号溝址出土土器



24号溝址出土土器



1.5号溝址出土瓦塔 2.4号住居址出土瓦塔



3号住居址出土陶砚



1 天禧通寶（8號住居址） 2 刀子（6號住居址） 3 刀子（11號住居址）

4 釘（6號住居址） 5 麻皮剝器（25號土壤） 6 鐵鎌（10號住居址）

長野市の埋蔵文化財

- 第1集『信濃長原古墳群』
第2集『浅川西条』
第3集『中村遺跡』
第4集『塩崎遺跡群』
第5集『塩崎遺跡群(2)』
第6集『三輪遺跡—付水内坐—元神社遺跡』
第7集『田中沖遺跡』
第8集『篠ノ井遺跡群』
第9集『四ツ屋遺跡（第1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
第12集『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡—』
第13集『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
第15集『箱清水遺跡(2)』
第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
第17集『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点—』
第18集『塩崎遺跡群IV—市道松節一小田井神社地点遺跡—』
第19集『土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』
第20集『三輪遺跡(2)』
第21集『芹田小学校遺跡』
第22集『長野吉田高校グランド遺跡』
第23集『横田遺跡群 富士宮遺跡』
第24集『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
第25集『南川向遺跡』
第26集『東番場遺跡』
第27集『小柴見城跡』
第28集『宮崎遺跡』
第29集『浅川端遺跡』
第30集『地附山古墳群』
第31集『町川田遺跡』
第32集『中条遺跡』
第33集『鶴前遺跡・塩崎城跡』
第34集『石川条里遺跡(4)』
第35集『篠ノ井遺跡群II』
第36集『屋地遺跡II』
第37集『篠ノ井遺跡群III』
第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
第40集『松原遺跡』
第41集『小島柳原遺跡群中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・壇田遺跡』
第42集『田中沖遺跡(2)』
第43集『雨宮遺跡』
第44集『塩崎遺跡群(7)』
第45集『石川条里遺跡(6)』
第46集『篠ノ井遺跡群(4)』
第47集『浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稻添遺跡』
第48集『小島柳原遺跡群中俣遺跡II』
第49集『三輪遺跡(4)』
第50集『浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡』
第51集『松原遺跡II』

長野市の埋蔵文化財第52集

田牧居帰遺跡

平成5年3月19日 印刷
平成5年3月25日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター
印刷 ほおづき書籍株式会社